かけがわ学力向上ものがたり

―我が校のものがたり　実践編―

掛川市教育委員会

「子どもたちの未来のために」

「わたしもそうやって考えてたんだけど途中で変わったの。前に出て説明していい？」「先生！ちょっと難しかったけど、やり方がわかったらできるようになった！」

教室では、子どもたちが様々な問題に対して友達と関わりながら解決しようと取り組んでいます。そこには、一人一人の子どもの「ものがたり」があり、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」があります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭・地域で共通理解をして、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、主体的・協働的に学習に取り組む子どもたちを育ててまいりました。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、学力向上への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践をまとめ、一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どもたちの学力向上の実現に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

平成２８年２月
掛川市教育委員会

目　　次

日坂小学校　　青木　史弥 ---------- 3
じっくり考え表現できる子～２年生として～

東山口小学校　野口　麻子 ---------- 5
学びの幹をつくり、枝葉を生い茂らせるために

西山口小学校　髙村　知史 ---------- 7
「思いを受け止め　伝えられる子」」の育成を目指して

上内田小学校　松下　文香 ---------- 9
「できた！」「わかった！」そんな思いが溢れる教室へ

城北小学校　　井上　幸也　岩水いづみ ---------- １１
「学び合い高め合う授業づくり」
ユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践

第一小学校　　犬塚　祐貴 ---------- １３
「書きたい、できた、楽しい」と感じる手立てを考える

第二小学校　　阿部　江里 ---------- １５
安心して学べる学級を目指して

中央小学校　　松浦　容子 ---------- １７
思いを受け止め、わかりやすく伝える子の育成

曽我小学校　　森下　志帆 ---------- １９
「わかった・できた」を実感できる授業

桜木小学校　　守屋　美保 ---------- ２１
構成力を高める授業づくり

和田岡小学校　萩田　歩 ---------- ２３
一歩ふみ出し続ける「和田岡小」！

原谷小学校　　匂坂めぐみ ---------- ２５
思いや考えをもち、学び合う子どもの育成
～学びの手応え「わかった」「わかってもらえた」を実感できる
国語科の授業づくり～

原田小学校　　花嶋留美子 ---------- ２７
３次構成で目的意識を持った学びを作る
～国語科単元構想の工夫～

西郷小学校　　児玉　侑香 ---------- ２９
自分の考えを持つ・練る・伝える・まとめる

倉真小学校　　法月　淳 ---------- ３１
「説明する力」を高めるＩＣＴ機器活用

土方小学校　　鴨川智香子　---------- ３３
「じっくり学ぶ子」の花を咲かせよう

佐東小学校　　林　　星菜　---------- ３５
板書でわかる、「聴く」ことで助け合う、授業づくり

中小学校　　増田七奈子　---------- ３７
「できた」「わかった」がいっぱいの授業を目指して

大坂小学校　　曽根　隆央　---------- ３９
「できた！」「わかった！」を実感し、進んで学び合う子の育成

千浜小学校　　鈴木　純子　---------- ４１
問題解決過程において、進んで自分の考えを伝える子どもの育成～理科～

横須賀小学校　細川　剛男・堀田　高弘・藤田真智子・竹内　洋介・西尾愛美 -- ４３
しっかり聞き、はっきり話し、考えを深め合う子の育成

大渕小学校　　伊藤　愛　---------- ４５
「思いやりのあるクラス」から学びの充実へ
～学習の構えを支えとして～

栄川中学校　　平岡　綾子　---------- ４７
じっくり考え表現できる子　～進んでかかわり、自分を深める～

東中学校　　鈴木　晶子　---------- ４９
「国語は楽しい」を生み出すために

西中学校　　太田　浩徳　---------- ５１
みんなが参加する授業

桜が丘中学校　湯山　珠沙　---------- ５３
「やる気」「やさしさ」「たくましさ」をもった子どもの育成
～道徳教育を基盤として～」

原野谷中学校　城下　俊介　---------- ５５
ようこそ、はらのやミュージアムへ

北中学校　　萩田　駿　---------- ５７
少人数を生かした授業

城東中学校　　岸　　美律　---------- ５９
「生徒が主体的に追究・表現」する授業をめざして

大浜中学校　　大杉　鏡康　---------- ６１
追及活動の工夫を目指して

大須賀中学校　神谷　昭吾　---------- ６３
かけがわ型スキルの育成を目指して

じっくり考え表現できる子～２年生として～

日坂小学校　青木　史弥

はじめに

本校の児童は素直な子が多く、学習に真面目に取り組むことができる子が多いです。しかし、自主性や積極性という点では、まだまだ、課題が多く見られます。

２年生の児童の実態はどうかというと、19人と日坂小の中でも多い人数構成ということもあり、授業中の発言も多く、活発な学習集団です。この子どもたちのよさを伸ばし、研修テーマである「じっくり考え、表現できる子」のめざす子どもの姿に迫るために次のような実践を行いました。

自分の考えをしっかりともつ　～主人公と同化させながら読み、感想を書く～

研修でめざす子どもの姿を２年生の段階では「自分の考えをしっかりともつこと」と押さえ、実践を行うこととしました。

国語科の物語文「スイミー」の学習では、主人公と自分を同化させて読み、スイミーの気持ちを考えていくことにしました。この姿に迫るために、この単元では、劇化、気持ちをふきだしに書き込むワークシートの活用、パンフレットを作りスイミーを読んだ感想を他の学年に伝える活動の設定などを手立てとしました。

これらの手立てにより、子どもたちはこの教材を意欲的に読み進めていくことができました。主人公と自分を同化させながら読むことで自分の感想をより深くもつことができ、また、他の学年にも伝えるという目的意識ももつことで、学習により一層夢中になって取り組む姿が見られました。

子どもたちはこの単元を通して、一人一人が自分の考えをしっかりともつことができ、その考えを友達に伝えようと意欲的に交流することができました。２年生の段階として、研修でめざす子どもの姿の土台となる自分の考えづくりとして意義ある実践となりました。

考えを伝えたくなるような課題設定　～目的のはっきりとした交流の設定～

子どもたちが進んでかかわり、考えを深めるための交流の場を設定し、意味のある交流となるよう、子どもたちが自分の考えを伝えたくなるような課題を設定することにも心掛けました。

国語科の「だいじなことを落とさずに、話したり、聞いたりしよう」では、子どもたちが考えたくなるような課題設定として、「迷子さがしゲームをしよう」という課題を投げかけました。ゲーム感覚で取り組むことで、子どもたちも課題に夢中になって取り組むことができました。

また、あえて迷子を探す手がかりとなる情報が不十分なアナウンスをすることで、答えを決めきれない状況をつくり、子どもたちの考えが対立する場面を意図的に設定した。自分たちの考えが正しいと発言しながらも、交流していく中で、十分な情報がないと答えが出ないことに全員が納得し、子どもたちは、「だいじなことを落とさないで聞くことの大切さ」を実感することができました。つけたい力に迫る交流をすることができました。

この実践を通して、誰もが考えを伝え合い、解決したくなるような課題を設定し、その課題を解決するために意見を出し合うという目的をはっきりさせた交流を設定することの大切さを改めて感じることができました。

来　年　度　に　向　け　て

本校の子どもたちの実態、２年生の実態を踏まえ、研修でめざす子どもの姿に迫るために実践を行いました。「自分の考えをしっかりともつ」のような２年生で身に付けた力は今後の学年の学習の大切な土台となるため、低学年で身に付けるべき力を確実に押さえ、単元を構成し、授業を行うことの大切さを改めて感じることができました。交流の場面については、本年度の実践の中で、子どもたちが考えを伝えたくなるような課題を設定することの大切さを感じ、今後も工夫していきたいと考えています。また、何のために、子どもたちが交流し、考えを伝え合うのかという目的をはっきりさせた交流については、より一層重点的に追究していく必要性を感じました。

実践を通して、『「つけたい力の明確化」「考えたくなる課題設定」「課題解決のための意図的な交流」が揃った時、目を輝かせ夢中になって取り組む子どもたちの姿がたくさん見られる授業が実現する。』という考えをもつことができました。このことを胸に、今後も子どもたちと一緒に授業を創っていきたいと考えます。

学びの幹をつくり、枝葉を生い茂らせるために

東山口小学校　野口　麻子

１　東山口小の子どもたちにつけたい力

平成２６年度定着度調査結果の考察から、学校全体として作文力が弱いことが分かってきました。また、平成２７年度全国学力学習状況調査結果の考察からも、国語Ｂ２の作文の結果が良くないことが分かりました。特に、文字数が決められていたり、観点を幾つか入れて書いたり、幾つかの資料から読み取ったことを入れたりと、決められた条件に合う作文を書く力が乏しく、かぎ括弧の使い方や改行の決まりなどの作文の書き方もなかなか身についていないことがはっきりしました。そこで、今年は普段の国語における作文と合わせ、語彙を豊かにする活動の一つとして、放課後学習支援の時間である寺子屋で作文指導を行っていくことにしました。

１年生は、平仮名をなるべく早く身に付け、たくさん書く活動を取り入れて、書くことに慣らすことを心がけました。毎時間書くことを取り入れ、黒板を見て写す、お手本を折り曲げてそっくりに写す、聞きながら写すなどの視写に力を入れることにしました。

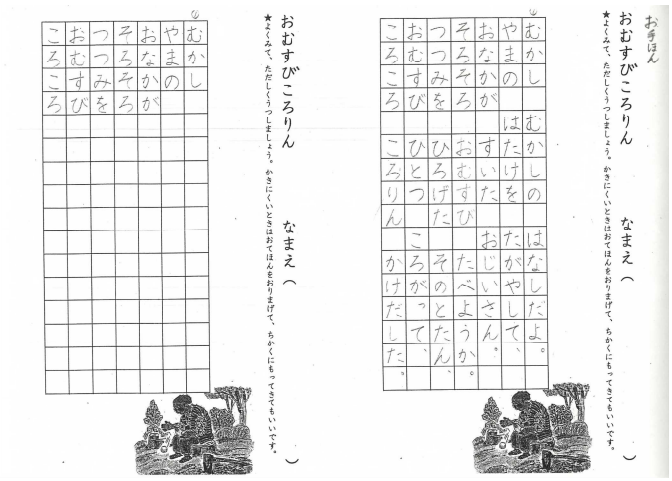
２　放課後学習支援「寺子屋」

東山口小には、週１回の放課後学習支援「寺子屋」の時間があります。これまでは、国語・算数の基礎の復習、ことわざや文法学習、読解力を高める学習をしてきました。この時間に作文指導を取り入れることにしました。まず、作文指導実施計画を立てて問題を作成した。１年生のほとんどの子は、教科書の文を毎日音読していると暗記してしまいます。そこで教科書の文を抜き出したものを中心として作成し、点や丸やますの使い方を意識させるようにしました。

３　ステップアップワークシート

１年生の国語の授業では、「好きなことを知らせよう」「楽しかったことを書こう」「自動車図鑑を作ろう」といった単元を貫く言語活動を行い、文の組み立てを学習させてきました。その合間に９月から１月までの８回の寺子屋で、聴写から視写の順番に文を書く練習をしました。

初めは、ますを意識するよう空ける部分がわかるよう印をつけたり、文をところどころ入れ

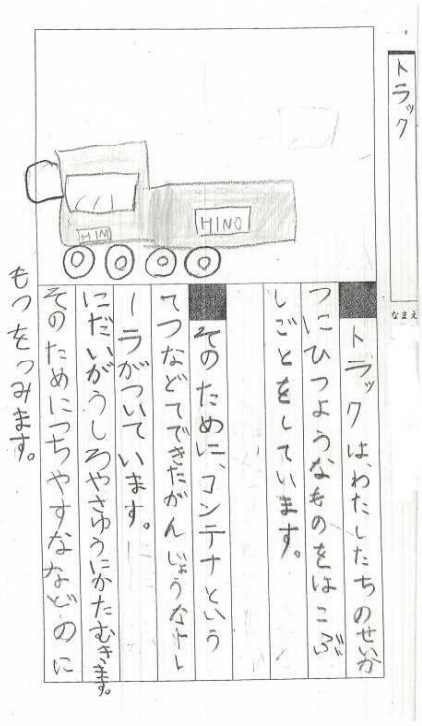


るようにしたりしたワークシートを使いました。慣れてくると、最初の文字しか入っていなかったり、文章の量を増やしたりしてステップアップするようにしました。この頃では、時間内に全員視写ができるようになり、誤答が減ってきています。作文も、長くわかりやすく書けるようになってきており、自動車図鑑などはもっと書きたいと進んで取り組む姿が見られました。

４　作文を楽しんで書ける子に

ステップアップワークシートの利用により、子どもたちは作文に自信を持って楽しく取り組むことができるようになってきました。作文指導は段階を追って継続して行うことで、着実に力がついてくるものと感じました。また、何回も視写をするうちに「は、を、へ」をうまく使えなかった子どもたちが、少しずつ正しい書き方を覚えるようになった。定着度調査類似問題を行っているわけではないので、定着度調査の記述構成では条件付きの作文が書けなかった子も多いです。しかし、どの子もますいっぱい使って書いていました。また、国語の時間に書く感想もたくさん書ける子が増えました。

作文指導以外に行っている「今月の詩」の暗唱、朝の１０分間読書、読み聞かせといった語彙を豊かにする活動をこれからも続けながら、自分の思いを楽しんで文に表す子どもたちに育てていきたいです。



「思いを受け止め　伝えられる子」の育成を目指して

西山口小学校　髙村　知史

はじめに

平成 27 年度の西山口小学校の重点目標は、「相手の思いを受け止め　自分の思いを伝えよう」です。また、重点目標を受けた研修テーマを、「思いを受け止め　伝えられる子の育成　～ねらいを明確にした言語活動と課題設定を通じて～」として日々の授業を実践してきました。

本校は、平成 25・26 年度と市教育委員会指定研究「言語活動の充実」を受け、多くの成果と課題を得ました。大きな成果の１つとして、授業者が、単元全体を見通して、「児童にどのような力を身に付けさせたいのか。」を明確にした上で、授業を展開することを学校全体で取り組むことができました。しかし、単元を構成する１時間１時間に目を向けると、「児童に付けたい力が身に付いているのか。」という課題が残りました。そこで、本年度は、授業者が「『１時間の授業を終えたとき、児童にどのようなまとめを書かせたいのか。』を具体的にもてば、本時で身に付けさせたい力が身に付くのではないか。」と仮説を立て、研究を進めました。

５月の授業　国語科「たんぽぽのちえ」

単元名「じゅんじょに気をつけて読もう」を受けて、単元のゴールを「たんぽぽ先生の秘密の絵巻物を作ろう。」と設定しました。そこで、単元全体を通す学習課題を「たんぽぽ先生の秘密の絵巻物を作るために、『たんぽぽの知恵やそのわけ』『順序を表す言葉』を正しく読み取ろう。」と設定し、毎時間児童に投げかけて単元を進めていきました。

単元のはじめには、教材文全体を読んで感想を書きました。児童の感想には、「たんぽぽは、一度倒れた花の軸を、また起き上がらせるなんてすごいね！」「たんぽぽってこんなことを考えていたなんてびっくり！」というような感想が書かれていました。

らっかさんを飛ばす児童

そこで、教材文「たんぽぽのちえ」を読み進める段階では、「たんぽぽのすごいところを見つけよう。」と毎時間問いながら学習を進めました。その中で、「時を表す言葉」「順序を表す言葉」を追いながら読み、「たんぽぽの知恵」と「そのわけ」を読み取る学習を行いました。時を表す言葉と順序を表す言葉を見分ける時間では、「順序は算数で使ってるじゃん！」という言葉も出て、その後の学習にも大いに生かされました。「た

んぽぽの知恵」を具体的に身近な言葉で表現させる場面では、らっかさんの飛び方と、タオルを丸めた物の飛び方の違いを実際に表現させたことで、らっかさんの飛び方の特徴を、目で感じ自分の言葉で表現する姿が見られました。

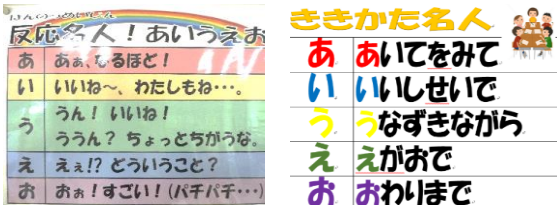
教材文を通して学んだことを絵巻物に活用する段階では、段落ごとの時間（とき）を表す言葉と、「たんぽぽの知恵」をまとめていったワークシートを、すべてつなげました。単元を貫く言語活動として取り組んだものを、絵巻物という形にすることによって、授業者は付けたい力を児童に身に付けさせ、児童は楽しみながら力を付けていきました。国語科を通して「達成感」「楽しさ」を感じながら、身に付けさせたい力を付けられるように単元を構成しました。

算数科で級友に説明する児童

重点目標・研修テーマに立ち返ると

授業を日々行っていると進んで表現することが得意な児童、苦手な児童がいます。しかし、重点目標「相手の思いを受け止め　自分の思いを伝えよう」を具現化させるためには、どの子にも表現させる機会を与えなければなりません。そこで、児童自身が「理解することができたのか。」と自己認識することができるように、主に算数科の授業を使い、多くの児童が級友の前で説明をする場を設定しました。「聞いて分かった。」と「聞いて分かった気がする。」では、大きな違いがあります。級友の発言を自分の言葉で表現しなければならない状況を作ることで、「聞きとる」ことを指導しました。

また、年度初めに掲示した「反応名人！あいうえお」だけでなく、「ききかた名人」の掲示をすることで、児童が、主体的に聞き、「聞いて分かった。」、そして「自分でも言える」力を育んでいきました。



「反応名人！あいうえお」と「ききかた名人」の掲示物

「相手の思いを受け止め　自分の思いを伝えよう」

人間は一人では生きられません。「相手の思いを受け止め　自分の思いを伝える」とは、どんなに社会が変化しても不易の部分ではないかと思います。今年度の実践を通して、授業１時間の中で身に付けさせたい力を身に付けるためには、「表現」をしなければ「力」は身に付かないことが分かりました。表現をさせるためには、「考えたくなるような問い」が必要です。これからも、職員研修の中で、授業者が児童に身に付けさせたい力がつくような「まとめ」を書くことができるような「問い」を考えていきたいと思います。そして、児童が「聞いていて良かった。」「〇〇さんと同じ考えで自信がもてた。」「今日は考えを〇つ作れたぞ。」というような、対話する相手を大切にする気持ちや、児童自身の自己有用感を今後も育んでいきたいと思います。

「できた！」「わかった！」そんな思いが溢れる教室へ

上内田小学校　松下　文香

「できた！」「わかった！」そんな思いが授業のあとに教室内に広がったら、それはとても素敵なことです。しかし苦手意識を持っていたり、集中することができずわからないまま授業が終わってしまったりする子が教室の中にはいます。本校では、どんな子でも「できた！」「わかった！」を実感することができないかと考え、授業はもちろん、様々な活動を通して、児童の学びを支えることを重点として取り組みました。

「できた！」「わかった！」が広がる授業づくり

学校生活の中心は授業です。「できた！」「わかった！」という思いを高めるために、校内研修では、主に２つのことに焦点を当てて学校全体で取り組みました。また、個への支援をより大切にするために、TT 授業も行いました。

●学習問題を授業の前半に

学習問題は、授業の高め合いや深め合い「わかったか？」「できたか？」に直結します。学習課題から学習問題への流れをすっきりとさせ、本時で１番押さえたい内容について考える時間をしっかりと確保するため、学習問題の提示をできるだけ早くするように心がけました。個人追求・集団追求の時間をたっぷりととることができるため、本時で押さえたい内容について、クラス全体でじっくり考えることができます。児童の「？」が「あ！そっか！」に変容する瞬間を大切にすることができました。

●授業の最後に確認問題

本時の授業で学習したことがしっかり身についているかを、授業の最後に確かめる活動を全校で取り入れました。児童の「なんとなくわかった」という思いを「うん、わかった！」という思いにするための、大切な時間となります。児童一人ひとりの定着を授業時間内に見取ることができるため、教師としてもとても有効な手立てとなりました。

１年生は、授業の最後に花丸をもらえることが嬉しくて、この確認問題の時間をとても楽しみにしているので、授業の最後まで集中して取り組むことができました。

●苦手な子も安心して取り組むことができる TT 授業

４～６年生の算数の授業は、TT で取り組みました。授業が進んでいる中でも、個別に支援することができるので、苦手意識をもっている児童も安心して授業に臨むことができました。また、小さな疑問や不安をその場で解消することで、「あ、自分でもできそうだ！」「もっとやってみたい！」という学習に対して前向きな気持ちを育むことができました。

学ぶ意欲を持たせるための環境づくり

「できた！」「わかった！」を実現するためには、授業だけでなく、学ぶ意欲をもって生活できるような環境づくりをすることも、大切な手段となりました。

●学びの時間

「学びの時間」は、毎週金曜日の放課後３０分を利用して行う課外学習です。本人や保護者の希望で参加する児童と、教師側から声を掛けて参加する児童がいます。金曜日に実施することで、１週間の授業の中で少し苦手を感じている子を見取り、参加を呼びかけることができるようにしました。

１年生は学びの時間が大好きで、毎回クラスの半数以上が参加しました。授業の中では、１人の子にずっと個別支援をすることはできませんが、学びの時間ならそれが可能です。「わからない」「できない」「苦手」という思いをもち、学習のやる気が落ちていた児童も、何回か参加して「わかるようになった！」「できるようになった！」という思いを実感することで、「学びの時間にでたい！」「もっと頑張りたい！」と意欲的に参加することができました。個別に教えてもらい、わからなかった問題がわかるようになり、花丸をもらったプリントをお家の人に見せることができる！･･･と、児童にとってはうれしいこと続きで、下校時にはどの子も満足げな表情になりました。

３～６年生は、この学びの時間を利用してパソコン学習も行いました。パソコンで学習することで、普段とは違う視点で学習を進めることができるので、児童から大人気でした。（e ライブラリーの活用）

●朝活動

朝活動の時間は、月～水曜日が読書（読み聞かせ）、木曜日がドリルタイム、金曜日が作文タイムと、１週間の中でメリハリをつけて活動しています。１０分間という短い時間ですが、曜日ごとに全校でやることがしっかりと決まっているため、入学したばかりの１年生も「今日は〇曜日だから、□□だ！」と、朝から集中して活動することができました。作文タイムでは、決められたテーマについて、１００マス以上を１０分以内に書くことを目標としています。毎週続けることで、自分の考えを表現することがだんだん上手になってきました。

●にこじろう運動

本校の軸となっている活動の一つに、「にこじろう運動」があります。児童のよさやよい表れを、教師や家庭・地域の方で称揚していく活動です。よかった表れがカードに書かれ、全校放送で紹介されます。授業や家庭学習・係の仕事やクラス遊びでの様子など、様々な角度から児童のよさを賞賛するように心がけました。にこじろうカードをもらうと大喜び。「次も頑張ろう！」と俄然張り切る児童たち。この思いこそが、前向きに頑張る活力となります。児童の自尊心を育むために、本校にはなくてはならない活動の１つです。

●教室づくり

授業で学習した既習事項を掲示し、子どもがすぐに確認できるようにしました。学習が進むにつれ、「前にやったときは･･･」「あのとき〇〇だったから」と、既習事項と本時の学習の内容を結びつけて考えることができる子が増えてきました。

「先生！ちょっと難しかったけど、やり方がわかったら、できるようになったよ！」「学びの時間に出てよかった～！だって〇〇ができるようになったもん！」･･･「できた！」「わかった！」を実感した児童の顔は、満面の笑顔で溢れています。この笑顔を見たとき、「次はどんな手立てを打とうかな？」･･･教師の新たな模索が始まります。

今後も児童が「できた！」「わかった！」を実感することができるような活動を大切にし、「もっとできそう！」「もっと知りたい！」と、児童の思いがさらに前向きになるように、取り組んでいきます。

「学び合い高め合う授業づくり」
ユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践

城北小学校　井上幸也　岩水いづみ

本校では…

> 研究主題　学び合い高め合う授業づくり
> 　～だれにでもやさしい学校、だれもがわかる授業による「確かな学力」の育成～
> 研修の視点
> 　①夢中になって学ぶ学習問題の設定
> 　②他と交流する中で自己の考えを深めたり高めたりする「学び合い」の実現
> 　③学ぶ意欲や関心が高まり、基礎・基本を確実に定着できる授業づくり

を受け、総合的に取り組む「学校力」を高めるため…

１．全校体制で、「じょうほく型生活づくり」「じょうほく型授業づくり」に取り組む！

じょうほく型 生活づくり

		学習環境	9	10	11	12	1	2	3
教室の環境整備	1	教室の整理・整頓を心がけ、不要な物を置いていない。							
	2	前面の黒板とその周りを整理・整頓している。							
	3	児童の机の上やロッカーの使い方を決めて、統一している。							
	4	教室の移動や下校前に机の周りの整理・整頓をさせている。							
	5	月や週の予定を掲示し、必要な学習用具やスケジュールを知らせている。							
	6	今日１日のスケジュールを提示して、朝の会で確認している。							
学習の準備	7	授業前、黒板がきれいに消されている。							
	8	授業開始時刻に席に座り、教科書などを見て待つことを指導している。							
	9	授業の開始前に必要な用具が準備されているか、確認している。							
	10	開始時刻と終了時刻を守り、あいさつしている。							
	11	机上の教科書・ノート・筆箱を正しい位置に置かせている。							
	12	筆箱の中身が揃っているか、確認している。							
		学級づくり	9	10	11	12	1	2	3
ルール	13	児童は、学校の生活の仕方がわかる。							
	14	城北小学校「生活の約束」を守って生活させている。							
	15	学級内での役割（当番や係等）についての行動の手順・仕方など（手順表、マニュアル等）が示されている。							
	16	宿題の取組方や宿題の提出方法、場所が決められている。							
温かい学級	17	一人一人の困り感を把握している。							
	18	児童たちには居場所があり、認められているといった安心感がある。							
	19	児童の良さやがんばりを「かがやき賞」等で賞賛している。							
	20	活動意欲をそぐような発言や不適切な発言には、望ましい発言の仕方を教え、訂正させている。							
	21	児童の特性や長所を生かした活動を設定している。							
	22	トラブルがあったときの解決方法を示し、児童同士でも解決できるように教えている。							
	23	学級全体で「○○なクラスにしよう」という意識をもたせている。							

じょうほく型 授業づくり

		授業の基礎技術	9	10	11	12	1	2	3
教員の話し方・発問や指示	1	児童のかがやきを認め、肯定的な表現で話しかけている。							
	2	指示などは聴覚的（言語）だけでなく、視覚的（板書など）に提示するようにしている。							
	3	教室の隅で、話す表情を意識しながら、聞き取りやすい声、速さで話すようにしている。							
	4	抽象的な表現、あいまいな表現を避け、具体的な表現で話すようにしている。							
	5	全体への発問や指示をしたあと、個別の声かけなどをして一人一人を見届けている。							
板書やノート・ファイル	6	赤線で囲んだ学習問題で始まり、青線で囲んだまとめに向かっていく授業の流れ、授業の内容が分かる板書を構成している。							
	7	板書は教室の後ろの児童からも見えるような文字の大きさ、行間にしている。							
	8	ノートに取りやすい、ポイントをしぼった言葉、文章で板書をしている。							
	9	ノートの使い方（教育課程全体計画Ⅲ－２）を指導している。							
教材・教具	10	具体物・写真・絵・動画・ICT機器などを使用し、提示する内容を分かりやすくしている。							
	11	学習で使うプリントやワークシートは、シートの大きさ、字や書き込み部分の大きさに配慮し、読んだり書いたりしやすいようにしている。							
		授業の工夫	9	10	11	12	1	2	3
焦点化・視覚化・共有化	12	付けたい力を明確にし、単元や本時の始めに、学習の流れやゴールを提示し、児童が見通しをもって取り組めるようにしている。							
	13	授業のねらいに即して、活動を焦点化している。							
	14	授業のねらいに即して、視覚化を図っている。							
	15	主体的な学びや、まとめ（振り返り）を保障するための、学習活動の時間配分を工夫している。							
	16	自己の考えを深めたり高めたりするためのペア学習、グループ学習、一斉学習など、様々な学習形態を工夫している。							
	17	本時の付けたい力を全員で確認する、まとめの時間を確保している。	9	10	11	12	1	2	3
		個別の支援							
個別支援	18	気になる児童についてつまずきを把握している。							
	19	気になる児童のつまずきに対する支援を講じている。							
	20	気になる児童のつまずきに対する支援について評価・改善している。							

生活づくりでは、学習環境として「教室の環境整備」、「学習の準備」を設定し、気持ちよく学校生活を送るための環境づくりに努めました。学級づくりとして「ルール」、「温かい学級」を設定し、だれもが安心して生活できる学級を目指しました。城北小の伝統でもある「かがやき賞」を各ステージ一人一枚以上渡し、賞揚することで、子ども一人一人の個性や能力、良さを的確に見取り、価値付け、認めることができ、子どもの主体性、自己肯定感を育むことができ

ました。

学びづくりでは、教員の話し方や板書、教具などについてのチェック項目を設定し、子どもたちにとって学びやすい環境をめざしました。

毎月はじめの学年会で各担任が子どもの様子を出し合いながらチェックすることで、今後の課題が見え、どの子にも生活・学習しやすい環境にしようとする意識が教員全体に高まりました。

２．全校統一で、授業環境のベースを整える！

①ノートの使い方ルール

「学習問題は赤囲み」「まとめと振り返りは青囲み」「算数ノートには左端に赤線を引く。」など、ノートの使い方ルールを作りました。

②授業の終わりの10分間は「振り返りタイム」

まとめとは、みんなで本時の学習事項を確認すること、振り返りとは、本時に学習したことを自分の言葉で表現することと定義付けました。また、この二つを行う時間を「振り返りタイム」として、授業の終わりの10分間に位置づけることを、一時間の授業の基本としました。

③「家庭学習の手引き」を作成

家庭学習時間の目安や「自学」とはどんな学習なのかを本校なりに定義づけ、子どもたちと保護者で共通理解をしました。わからない部分や、今日の授業で少し不安だったことを､自学で補おうとする子どもたちの意識が芽生えてきました。

３．全校体制で、「授業で使う力」を鍛える！

①スピーチタイム

４年生「最近のニュースについて思うことを４文で。」…など、学年の実態に適した条件とテーマを与え、全クラス、朝の会に「スピーチタイム」として位置づけました。

②金じろうタイム

「～について、〇 段落でまとめよう。」などの条件とテーマを与え、作文演習を行ってきました。また、視写を繰り返し行って、書くことに慣れさせたり、会話文の演習を繰り返して文章の中で確実に使えるようにさせたりして、学年の実態に応じて、言語事項の指導を交えながら、様々な書く活動を行ってきました。

４．継続で、学力向上へ！

すっきり整理整頓された教室は学習意欲の向上につながりました。自分の考えをノートにまとめるのに時間がかからなくなった子は、発言が増えました。人前で発言することを苦手とする子は堂々と発言するようになりました。また、振り返りを書くスピードが全体的に速くなった等、授業の様々な箇所で底上げが実現しました。今年度は、全校で生活・授業の基盤作りを統一することで、子どもたちの、学年から学年への授業環境の適応へのストレス・戸惑いの軽減を目指しました。どの学年に進級しても、どの担任になっても学校生活の基盤や学習活動していく環境の基盤は変わらないという安心感のもと、来年度の学年へとつなげたいです。

「書きたい、できた、楽しい」と感じる手立てを考える

第一小学校　犬塚　祐貴

ゴールの明確化で学習意欲の向上と継続を

「こんなにたくさん文を書けないよ。」「本を読むのは好きだけど、作文は苦手なんだよね。」本学級にもこうした思いを持っている子どもがいます。

国語科「すがたをかえる大豆」の教材は、大豆がどのような食品に変化するのかが書かれている説明文です。この教材を通して、書くことへの苦手意識を和らげ、書いてみたいという意欲を育てたいと考えました。

この単元では、「食べ物変身ブック」を作ることがゴールであると子どもたちに伝え、目的をもって単元の学習ができるようにしました。第１時に教師の作った「牛乳の変身ブック」を提示したところ、「おもしろそう！」「ほかの食べ物でも書きたい！」と子どもたちの反応には早く学習に取り組みたい気持ちが表れていました。

さらに、書く意欲を高めるためには何を書くのか、どう書くのか、誰に読んでもらうのかといった見通しをもつことが必要であると考えました。

そこで単元を通して「読む人にとって分かりやすい説明文を書くコツ」を見つけていく学習を計画しました。自分自身が筆者になって「食べ物変身ブック」を書くことで、関心意欲が高まりました。

また、皆で見つけた書くコツを共有していくことで子どもたちの満足感も高まり、学習意欲の継続にもつながりました。

ゴールの明確化を図ることが、１時間１時間の学習に必要性を持たせ、目標を見失うことなく意欲的に取り組める授業につながったと感じました。

視覚化・ワークシートの工夫で子どもの思考を深める

「学びのユニバーサルデザイン」の視点に立った授業改善の観点に「視覚化」があります。視覚化とは子どもの思考を助けるために、学習していることを分かりやすく黒板などに示すことです。私は黒板を構造化すること、ワークシートを工夫することで、どの子にも分かりやすい授業を意識しました。

説明文の、「はじめ」「中」「終わり」の構成を考える時間には子どもたちが視覚的にイメージできるよう、１枚のワークシートで段落全体を捉えさせ、黒板もワークシートに対応した形態で書くことで、文章構成のどの部分を考えているかが分かるようにしました。

また、どんな順序で食品が説明されているか考える際には、１人に１セット、段落の中心文が書かれた札を用意し、並び替える活動を取り入れました。実際に手を動かして並び替えたり、ワークシートに貼られた写真と関わらせながら文の順序を考え

ることで、子どもたちは写真と文の対応や接続語の役割にも気づくことができました。

「この段落を入れ替えるとどうなるだろう？」と実際に黒板の文の札を入れ替えて考えると「だめだよ、だって接続語が違うよ。」と子どもたちは筆者の説明文の書き方の工夫に気づいていきました。

焦点化にせまる発問の転換

「筆者はどんな順序で食品を説明しているか」という学習課題に、「『はじめに』と書かれているからこの文は最初だ。」「食品の写真を見ても分かる。」といった意見が子どもから飛び出します。

しかし、「説明文のコツ」つまり、読み手を意識した筆者の工夫に迫っていくことが本単元のねらいです。「どうして筆者はこの順序で書いたのだろうか。」という切り返しの発問をすることで筆者の書き方の工夫へと子どもの思考が切り替わりました。「作り方が簡単な順に書いているんじゃない？」「ぱっと見て大豆ってすぐ分かるものから、分からないものになっていくよ。」「簡単なものから書かないと初めて読む人はわからない。」と、より筆者の立場に立った観点から意見が出てきました。

発問により、今何を考えるのかを焦点化することで、学級の子どもたちがお互いの意見を吟味し、高め合う授業につながったと感じます。

グループで交流、グループで評価

単元を通して、ペア・グループ学習を積極的に取り入れました。本単元では読み手に分かりやすい説明文を書くという目標のもと変身ブックを書いています。そこで学習した「説明文のコツ」が使えているかを意識しながら交流することで、お互いに文章が精選され、分かりやすい変身ブックを書くことができました。

日ごろ、書いた文を他者に読んでもらい、評価してもらう経験が少ないため、今回の学習で一貫して「読む人にとって分かりやすい文章が書けたか。」という意識を持たせることができました。グループ交流を通して、子どもたちも納得のいく文章を書き上げた満足感を感じることができたのではないかと思います。授業を進めていく中で、書くことに抵抗がある子も自分の選んだ食材で、楽しんで書いている様子が見られたことが大きな成果だと感じられました。

本校では学習意欲の向上に力を入れています。学年が上がっていくにつれ、さまざまな形式、内容で文章を書くことになります。今後も子どもたちが「書くことって楽しい！」と思える授業研究を行っていきたいです。

安心して学べる学級を目指して

第二小学校　阿部　江里

自信をもつために

４月。私の学級では、自分の意見に自信がもてない児童や、一部の活発な友達の考えを聞き、授業に受け身になる児童が多く見られました。また、自分の考えを発表できる児童は、いつも決まった子ばかり。自分の考えを話して満足、中には友達の考えを最後まで聞かずに発表しようとする児童も見られました。

自分の意見に自信をもつためには、周りから認められることが大切だと考えました。「自分の意見をしっかり聞いてもらえる」安心して学習できる学級の環境作りに取り組んできました。

話して、聞いて、反応して

（１）様々な反応ができるように

授業中、発表した児童が「どうですか？」と聞くと合い言葉のように「いいと思います。」と答える子どもたちの反応に疑問を感じました。自分とは違う意見の友達に対しても「いいと思います。」と返すこともあったからです。中には、発表をきちんと聞かずに答えるだけの子も。そこで、いろいろな反応ができるように反応の型を示すことにしました。慣れるまでは、「あいうえお反応」を使いました。

あ･･･「あぁ～」「あっ、そうか」
い･･･「いいです」「いいね」
う･･･「う～ん･･･（疑問）」「うんうん（うなずき）」
え･･･「えっ（驚き）」
お･･･「おぉ～！」「同じです」

慣れてくると、子どもたちから自由な反応が次々と出てくるようになりました。さらに反応だけではなく、学習中のつぶやきも増えました。また、教師である私自身も一人一人の児童を大切にし、児童の手本となるような温かな言葉かけや対応を心がけました。その結果、子どもたちは最後まで自分でしっかりと聞いて反応する、自然と友達の発表を大事にするようになりました。

（２）聞く人を意識した話し方を

教室を子ども同士の意見交換の場にするために、教師の立ち位置に気をつけるようにしました。いつも私が黒板の前にいると、どの子も前を向いて発表をしてしまい、子どもと教師のキャッチボールになってしまいがちです。そこで、意図的に発表する児童の対角線上に立つように心がけ、発表者が他の児童に向かって話すこと

を意識させるようにしました。「〇〇さんの方を向いてみよう。」「ノートを持って発表しよう。」「少しだけ声のボリュームを上げてみようか。」と声かけを続けました。とは言うものの、声を出すことが苦手な児童もいます。そのときには、「今、〇〇さんはどんなことを言ってた？」と他の児童に聞き返すことで、「〇〇さんの言ってたのは・・・・・・ということ。」と近くの友達が自分の言葉で言い換えられるようにもなりました。話すことが苦手な児童に対して、周りの児童が支える態勢ができてきました。

進んで学ぶ子～国語の授業で～

４年生の国語では、登場人物の行動や気持ちの変化を想像して読むことを「ごんぎつね」で学習しました。ごんの気持ちの変化が分かるように毎時間ごんの気持ちを吹き出しカードに書き、それをリーフレットにまとめました。

ごんの気持ちの変化を読み取るための手立てとして、導入やまとめの部分で心情曲線を使いました。ごんと兵十の心情を❤の色と場所で表すことにより、気持ちの変化が視覚からも分かりやすくなりました。児童から「もっと兵十に近づいていると思う。」「ごんと兵十の気持ちが重なった。」などと意見が出され、進んで活用する姿が見られました。

毎時間のまとめでは、「これまでは･･･という気持ちだった。でも･･･という気持ちになった。」というように、「これまで」「でも」を使って前後の気持ちの変化をまとめるようにしました。まとめがはっきりし、評価に生かしやすくなりました。

児童は「ごんぎつね」を読んでごんの気持ちを考えていくうちに、物語の世界に入り込み、「ごん」のことがどんどん好きになっていきました。自分が想像したごんの気持ちを友達に伝えたい、友達の考えも聞きたいと、進んで学ぶ姿が見られました。教師自身が児童に「この力をつけさせたい」「こうなってほしい」という願いをはっきりともち、教材研究を進めていくことが大切だと改めて感じました。

安心から意欲へ

12月の児童アンケート「話す・聴くを意識できたか」という質問に対して、100％の児童が「そう思う・ややそう思う」と答えました。今後も、安心して学べる学習環境の中で一人一人の意欲を引き出し、「私はこう思う。こう考えた。」と自分の考えをしっかりともてる児童、そして、それを伝えることができる児童を育てていきたいと考えています。

思いを受け止め、わかりやすく伝える子の育成

中央小学校　松浦　容子

子ども同士が語り合う授業を目指して

久しぶりの低学年担任で、子どもたちのキラキラした瞳に感動しながら授業を行っていた４月。一生懸命先生に向かって、自分の考えを話してくれる子どもたち。私も一生懸命相づちを打ちながら、その話を聞いていました。

５月のある日、私に向かって楽しそうに語る子どもの背中ごしに、少し飽きてしまったような表情をする数人の子どもたちの顔が見えました。その時、ふと、尊敬する先輩教員がよく口にする「子どもが子どもに語る授業」という言葉を思い出しました。その日から「先生と話す子ども」ではなく、子どもたち同士が語り合う授業を目指して、日々の授業に取り組んできました。

思いを受け止め、わかりやすく伝える子

子どもたち同士が語り合う授業を目指すには「話す子ども対聞く子ども」の形が成立しなければなりません。そこで語る側の子どもの「わかりやすく伝える力」、聞く側の子どもの「受け止める力」を育成していく必要があると感じました。

そこで、以下の２つの取組をもって、本校の校内研修テーマでもある「思いを受け止め、わかりやすく伝える子」とも関連づけ、その育成を目指しました。

１	３ＢＩＧを活用して，伝え合いの土台となる力を身につける
２	友達との関わりを楽しむ場の設定

友達と関わる楽しさを感じるためには

１　３ＢＩＧを活用して，伝え合いの土台となる力を身につける

「３ＢＩＧ」とは、子どもたちが意欲的に学び、積極的に思いを伝え合うために、意識させたい授業三本の柱であり、本校の伝統とも言えるものです。

本校の取り組みとして、第二ステージに「ＢＩＧ　ＶＯＩＣＥ表で説明名人」と称した「伝え方の型」を用いて自分の考えを伝える活動を行いました。

２年生は拡大した「ＢＩＧ　ＶＯＩＣＥ表」を貼っておき、児童自ら表現する際の参考としたり、児童の名前入りのシールを貼ったりして、賞揚に使用したりしました。

第三ステージには、「ＢＩＧ　ＥＹＥＳで反応名人」の取組を行いました。子どもたちの優れた反応を集め、短冊に書き、掲示することで、よりよい反応の仕方を広めていきました。

これら２つの取組から、わかりやすく伝えれば、よりよい反応が生まれ、その反応が更によりよい表現を生み出すことを実感しました。

２　友達との関わりを楽しむ場の設定

「伝えたいな。」「知りたいな。」「説明を聞いてわかった。」「自分の考えをわかってくれてうれしい。」というような思いをもてる活動の設定を心掛けました。

⑴　子どもの思いを表現する言語活動

本校の校内研修の重点として、「意図的に思いや考えを伝え合う場を設定する」「単元を貫く言語活動の工夫」の２点を挙げています。また、国語科を窓口教科としており、学年ごと単元を貫く言語活動の工夫に取り組んでいます。

６月に２年部で取り組んだ「お話の好きなところを友達に紹介しよう～スイミー～」では、紹介カードを用いながら、友達との交流を楽しむ子どもたちの姿を見ることができました。授業を通して、「スイミー大好き」な子どもたちが育ち、その思いを表現したカードだからこそ、「伝えたい」「友達の思いを知りたい」と思えたのだと感じました。

その後もペープサート劇を用いた「お手紙」、生活科「おもちゃランド」と関連づけた「おもちゃの作り方説明書」など、学年部で相談しながら実践を重ねてきました。これらの取組から、子どもたちの中に伝えたい思いを育てること、その思いを表現する力をつけること、子どもたちが表現するのに最も適した言語活動を設定することの大切さを痛感しました。

⑵　「コミュニケーションタイム」で「楽しい！わかる！」経験を

子どもたちは「コミュニケーションタイム」が大好きです。ペアや少人数グループで自分の考えを自由に伝え合う時間です。自分の考えを作る段階から全体で伝え合う段階に進む前、少人数での表現活動など様々な場面、意図で取り入れています。自分の考えを作ることが難しかった子が、友達の説明を聞き、自分の考えの参考にすることもあります。（参考にした時は赤でノートに表示）

伝え合いの質を高めるための教師の出番

「〇〇さんの説明につけたして…」「その考えわたしと似てる！その理由が言えるよ！」「その説明、すごくわかりやすいね。次はぼくもやってみたい！」と、子どもたちが一生懸命語りかける相手は、共に学び合う子どもたちです。

そのような中で、教師である自分の出番についても意識するようになりました。子ども同士の考えを分類・関連づける、授業のねらいに迫るために補助発問や切り返しを行うなど、子どもたちの伝え合いの質を高めるための教師の出番について、今後もさらに研修を積んでいきたいです。

「わかった・できた」を実感できる授業

曽我小学校　森下　志帆

本校では、今年度より国語科において「子ども一人一人が「わかった・できた」を実感できる授業をめざして」をテーマに研修を積んできました。その中でも、５年生の実践について紹介します。

基礎基本を押さえて

教室前面に「学習３（スリー）」の押さえが貼られています。

① 学習用具をそろえる
② 聴き手を見て話す
③ 話し手を見て聴く

曽我小　「聞く」「話す」レベルアップ表

話す	レベル	聞く
友達の考えを言いかえたり ふくらめたりして話す	5	自分の考えを深めながら聞く
わけを入れながら話す	4	自分の考えと比べながら聞く
友達の考えにつなげて話す	3	うなずいて聞く
聞き手を見てはっきり話す	2	話し手を見て聞く
場に合った声の大きさで話す	1	だまって最後まで聞く

この３点が、毎日積み重ねていく学びの基本であると考え、徹底90％を目指してきました。またその中でも、「聞く」「話す」は、掛西学園の共通実践項目でもあります。段階表を使ってステージ毎に個人・学級で振り返りをし、次の目標を定めてレベルアップを図りました。

学習用具に関しては、家庭学習の内容や時間についてのお便りとともに年度初めに家庭に配布したり、年度途中にチェックシートを用いたりして共通意識を持たせています。

「書くこと」を中心に

５年生の国語の学習では、言語活動において活動を報告する「活動報告書」と提案する文章「提案書」を書く単元を夏と秋に行いました。その学習の時期が異なる「書くこと」における指導について、関連性をもたせて授業を行いました。

「活動報告書」を書く単元では、事実（報告）と考え（考察）を区別し、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすることを身に付けさせます。「提案書」を書く単元では、読み手が考えを明確に理解できるように書くことを身に付けさせます。これらを目的として、単元計画を立てました。

「わかった・できた」を実感

① 例となる文章を読み込む

７月の「活動報告書」では、目標達成のために、例となる活動報告書を読み込む学習に力を入れて行いました。板書には、拡大したものに色分けをして視覚的にも構成がわかるようにしました。それにより、文の長

さ、簡潔に書く箇所と詳しく書く箇所、文体の統一や文末表現の違いなどについての理解につなげました。

② 友達の下書きにアドバイスをする

下書きを友達と読み合い、良い点とさらに良くするためのアドバイスを付箋に書く活動を行いました。アドバイスを書くために、例文の読み込みを思い出し、友達の下書きにじっくりと目を通しました。また、友達のために記入したアドバイスが、自分の文を振り返るきっかけになったり、自分の不安だったところが解決したりする様子も見られました。

③ 例となる文章を比較する

秋には、既習内容となる「活動報告書」とこれから学習する「提案書」の例文を比較して読ませました。板書には、７月に使った「活動報告書」の拡大と「提案書」の例を並べ、同じように色分けをすることで視覚的に理解を助けるようにしました。この学習により、表現や内容、書きぶりの違いに気付くことで、「活動報告書」とは異なるものであることを理解させ、見通しをもたせました。この見通しが、後に文を書くときに大変役立ちました。

研 修 の ま と め

今年度は、国語における「わかった・できた」について研修を進めてきました。５年生の「書くこと」における実践にあたって、前時までの学習を生かした授業展開をしたいと考えました。そこで、今回は単元を超えて資料を提示し比較する形になりましたが、「同じ・似ている」が多く挙がりました。そこから「？」を見つけ、練り合うことで、本時の「わかった・できた」そして、単元の「わかった・できた」につながる授業をしたいと思いました。また、提示する資料や板書について、大きく示し、項目によって色を変えることで視覚的なユニバーサルデザインの視点を取り入れることを心がけました。

校内全体を見てみると、効果的に言語活動を組み込むにはどうしたら良いかを考えることができたという声が挙がりました。また、つけたい力と言語活動、そして児童の実態とをぴったりと結び付けた授業展開をするため、研修を続けていきます。

構成力を高める授業づくり

桜木小学校　守屋　美保

初めに

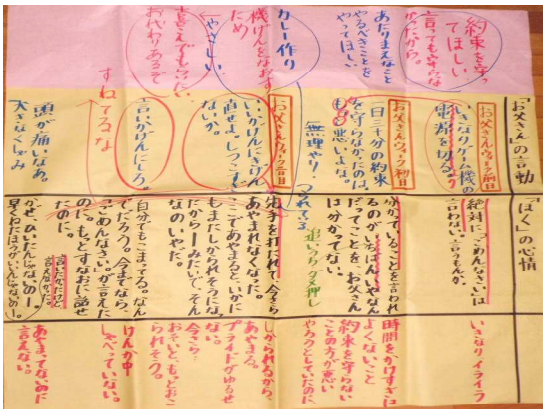
全国学力・学習状況調査から見える授業改善の一つを、結論に向かって筋の通った構成力のある文章を書く力を高めることと分析しました。そこで意見文、鑑賞文、討論会などさまざまな文章の種類に応じて、構成について考える実践をしました。

自分の経験と比較する読みへのアプローチ　～「カレーライス」の実践～

高学年の読みの力は、物語の登場人物の気持ちを理解するだけでなく、自分の経験と比べて作品を読み味わう力が求められます。これは今後の読書活動を継続する上で、作品を総括しながら、自分の生き方を見つめていく読みにつながっていくと考えました。そこで、次のような読み取りを計画しました。

① 主人公（同年代の少年）の気持ちを共感的に読み味わう。
② 主人公と相対する父親の気持ちを父親の立場で読み味わう。
③ 両者の気持ちを考えた上で、自分の経験と比べて読む。

主人公から別の人物へと読みの視点が移ったことで、同じ場面でも新たな解釈を加え、主人公へ同化したのち自分の経験と比較する読みへと移行しました。「主人公は」「自分は」という視点で自分の考えをまとめることができました。

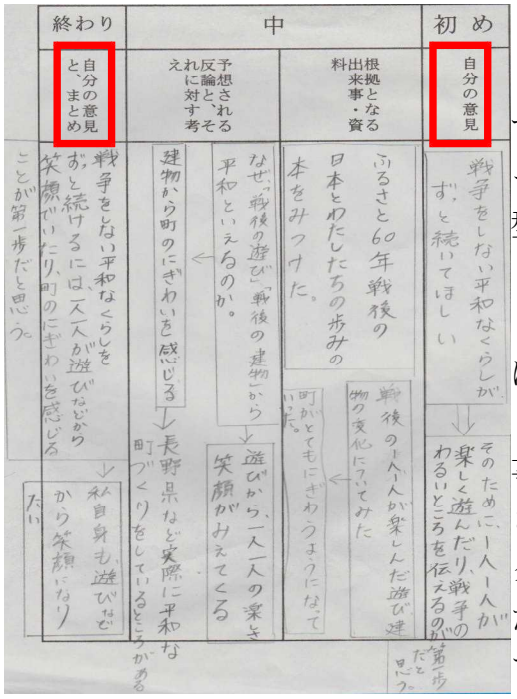


「ぼく」のいらだちに共感しつつ、父親の気持ちについても考えた。
父親の気持ちを想像できるところが６年生らしい。

結論を導き出す討論の構成～「学級討論会」の実践～

討論は「聞く・話す」のどちらの力も問われる学習です。また「肯定派」「否定派」「聞く側」三者が、テーマから離れずに自分たちの主張をしなければなりません。グループで「肯定派」「否定派」が主張を練り合ったり、討論で質問される内容を予想したりして、討論の準備をします。「聞く側」は両者がどんな主張をするかを予想します。それぞれの立場で主張を繰り広げ、主張を貫く根拠はどちらの方がより納得がいくかを判断しながら聞くことに挑戦しました。

グループの深め合いによる強い主張の構成

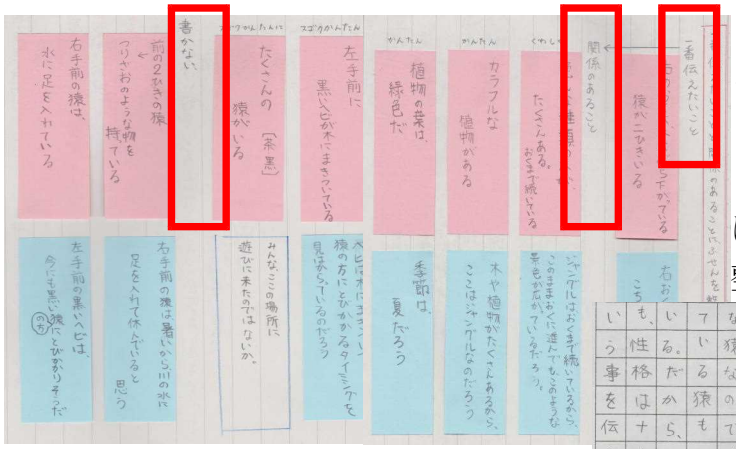


～「未来がよりよくあるために」の実践～

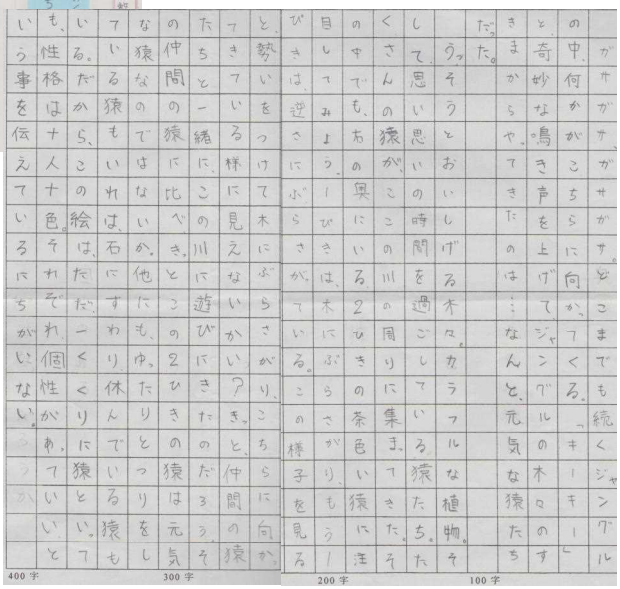
伝えたいことを主張するには、構成が必要です。小学校では、「初め」「中」「終わり」といった三段落の中で、結論が始めにあれば「頭括型」、終わりにあれば「尾括型」、初めにも終わりにもあれば「双括型」といった定型を学習します。高学年では、強い主張を展開しなければなりません。双括型で主張文を書きました。

主張をするために、自分の考えの根拠となる事実やデータを収集することが必要になります。さらに、主張に向かって根拠が適切であるかをグループで主張の弱さや不足を指摘し合いました。主張を強いものにするために、互いに助言できる交流をしました。

注目して、解釈する鑑賞文の構成　～「この絵、私はこう見る」の実践～



自分の見方、解釈を表現して伝えます。絵のどの部分に着目し、どのように見たのかを付箋に書き出します。伝えたいことに関係づけて付箋を整理します。整理する中で「一番伝えたいこと」「関係はあるが、簡単に触れるもの」「書かないもの」と分け、鑑賞文の構成をしました。さらに400字と時数を制限しました。



着目する部分や着目点の移動が分かる構成となり、書き手の視点を読み手が追うことができる文章となりました。

終わりに

最近、卒業作文を書かせました。どんな成長のあった６年間であったかを考えさせました。下書き用紙を裏にして、「初め」「中」「終わり」を使って構成を考えていました。そこには１年間の学習を生かし、伝えたいことを練ろうとする姿がありました。

一歩ふみ出し続ける「わだおか小」！

和田岡小学校　萩田　歩

わ　『私たちの道徳』を活用した「道徳教育」を基盤に

本校は２年間に渡り、桜が丘学園での「道徳教育」研究の指定を受けました。そして、『私たちの道徳』を活用し、「かけがわ道徳」を核とした人づくり「道徳教育」と、「学力向上」を２本柱として取り組んできました。一歩ふみ出した『我が校のものがたり』【６月ＨＰ公開】は、たくさんの足跡を残し、紡がれました。

だ　誰もが学びやすい！「学びのＵＤ『わだおか支援』」と「授業５原則」

「授業５原則」の「①開始時刻を守ろう」では、何事にもけじめをつけてきたことで、開始時刻で確実に授業がスタートでき、４５分間の充実につながっています。「⑤忘れ物をなくそう」では、指導を継続中ですが、日常の家庭学習忘れや持ち物忘れが、４月から顕著に減っています。「③進んで表現しよう」「④人の話を集中して聴こう」でも、後述の「話し方・聴き方名人カード」を活用して価値づけることで、本校児童のよさである素直さが、前向きな学習態度となって表れています。

学びのＵＤにおいては、特に「だ：だまって動ける（指導・環境整備）」に努めました。集中の妨げとなる不要な前面掲示等は減らし、必要に応じて具体的な視覚支援を行うことで、落ち着いた環境での学習が続けられています。

お　オリジナルの取組　～「掛川の法則」に関連して～

「読書」においては、量と質の表彰を校長が行い、学級でもスモールステップで称揚し、習慣化を図りました。また、音読カードに、保護者宛だけでなく児童宛にも励ましを記し、３者でよさ・がんばりを共有しました。発表への自信を深めた子、自主学習を毎日続けた子、漢字書き取りを１日２ページ行うようになった子。自己肯定感の高まりは、学力向上の積小為大へのきっかけとなりました。

か　「かけがわ型スキル」定着を目指して

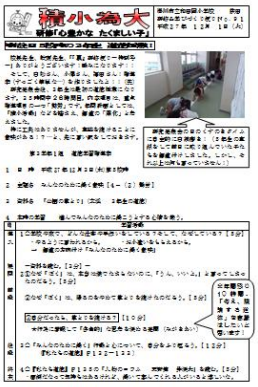
県教委が示す授業改善の視点「押さえる・仕掛ける・確かめる」を意識しながら、道徳教育の要となる「道徳」授業を窓口として、研究を重ねてきました。まず、中心発問を吟味して焦点化。そして、導入を５分程度にし、展開後段で児童が語り合う時間を長く設けました。特に「仕掛ける」場面では、考えの深化をねらって、切り返しの発問の工夫や構造的な板書に努めました。また、心のメーターや○×で意思表示する場面を設けたり、教師がわざと間違えたりすることで、全員の参加意識を高めました。これらは、「第３章」の「『新たな学びのプロセス』への転換（授

業過程の再構築）」や「言語活動の充実」で述べられる各教科の授業にも通じるものです。

そして、以下のような取組も進めてきました。

○「話し方・聴き方名人カード」の活用

努力を視覚化することで、挙手が少なかった児童はコミュニケーション力への一歩をふみ出し、みんなで語り合って一人一人が思考力や問題解決力を高めています。的確に表現する力は、根拠を示したり、順序を示す言葉を使ったり、引用したり、一文で答えたりすることの指導によって、高まってきています。



日常の授業の指導案

「話し方―カード」の活用紹介

○言葉に親しむ言語環境の充実

一人一人が国語辞典を常備し、各教科で活用しました。加えて、教室環境の一つとして、ことわざや慣用句のカレンダーを掲示することで、生活の中で親しむ姿が生まれました。学習指導要領解説国語編Ｐ６８に例示されている「推敲」といった言葉も、日常的に意図して使うことで、活用できる力として語彙を増やしています。そして、道徳教育と相まって、敬語や敬意表現を自然に使う姿が広まっています。

○考え、工夫する家庭学習

自主学習として「復習ノート」を推奨しました。また、漢字書き取りや算数のドリル学習でも、要点等を書き加える工夫をした児童を紹介してきました。互いに刺激し切磋琢磨する姿は、意思決定力や情報の選択・活用力にもつながっています。

○和田岡タイムの補充学習やテスト・ドリル類の選定

児童が課題を自覚するだけでなく、つけたい力を教師が確かめ押さえ直す、教材研究の一環となりました。

○校内・家庭との同一歩調

学びづくり部長・研修主任の立場から校内便り『積小為大』で発信し、啓発に努めてきました。家庭にも、学年便りで定期テストの考察等を伝えてきました。道徳研究でも力点を置いた、縦の接続と横の連携と重なる取組です。

日常の授業の省察

小 小さな一歩が…「積小為大」へと！

二宮金次郎の教え「積小為大」。実を結びつつあるこれらの成果をこれからも継続し、『我が校のものがたり』は次の一歩をふみ出し続けていきます。

思いや考えをもち、学び合う子どもの育成

～学びの手応え「わかった」「わかってもらえた」を実感できる国語科の授業づくり～

原谷小学校　匂坂　めぐみ

学習してよかったと感じる集団・授業作りのために

研修テーマ「学び合いを楽しむ子どもの育成」をふまえ、２年１組の子どもに学び合う力を育てるために指導していくことを心がけました。本校では、学び合う子どもの姿を具現化するために、目指す児童像が設定されています。低学年では、「自分の考えをもち、友達の考えもしっかり聞ける子」です。

２年生は、教師の言うことは素直に聞く子が多いです。しかし、発言しようとする子が限られており、友達に分かりやすく伝えたり、話したりする力が弱い子がいました。また、教師と子どもとの一方通行の学びが多く、友達同士で学び合う意識が薄い子がいました。そこで、自分の考えをもち、周りの友達の考えと比べながら聞く学習の喜びを体感させることが、学び合いを楽しむための大きな手立てになると考えました。

そのために、次の３つに力を入れて、授業を進めることにしました。

１　自分の意見や考えを持ち、表現する力の育成

進んで発表しようとする目立つ子がいる一方で、考えを持つことができない、発表しようと思うと、どう言ったらいいか分からないという子が多いという実態がありました。そのため、発表の前には、ノートやプリントに自分の考えをまとめる時間を十分に設けるように心がけました。

『わたしはおねえさん』のワークシートには、「自分と似ていて、～です。」「自分と違って～です。」と書く欄を設けました。自分自身の体験を思い出したり、友達の考えと比べたりして、記述できるようにしました。自信のない子は、ワークシートやノートを見て、そのまま発表してもよいことを伝えました。発表の前にはなるべく交流の時間を設け、ペアで考えを深めた後、考えに付け足しをしました。その時に、書き直しても良いと話したことで、苦手意識を持たずに学習に取り組めるようになってきました。

２１人という比較的恵まれた学習環境を生かし、考えを発表する時には、全員発表を促しました。「〇〇さんと同じで、～です。」という意見も大切にし、黒板に板書したり、ネームプレートを貼ったりし、学級の全員が発表できたという実感を持つことが増えてきました。

２　友達の考えや自分と比べながら聴く力の育成

「言います。」「聴いてください。」と言われたら、姿勢を正す、話す人の方を向くといった聴くための基本を確認してきました。「話す・聴くレベルアップ表」を活用しながら、聴くための基礎基本の徹底も心掛け、自然に発表者の方を向く子どもも増えてきました。

「〇〇さんと似ていて～です。」「〇〇さんに付け足しで～です。」と考えを比べながら聴くように、学級で共通の「話型」を作り、掲示しました。子どもたちは、いつもその話型を見て、発表の手がかりをつかみ、意見を伝えていました。

『しかけカードの作り方』では、写真だけの紙、大切な所を強調した文章、教科書そのままの文章の３つから、各自で選び、カードを制作しました。

分かりやすかったことと、難しかったことの発表の時には、「なぜ、〇〇さんと違って、カード作りに失敗したのだろう。」と「〇〇さんと似ていて～です。」と、自分の考えと友達の考えを比べながら聴く姿が、たくさん見られました。

３　学級全員が学び合う授業作り

授業の中で、違う考えや間違っているのではないかという意見が出された時には、「どこが違うのだろう。」「どうしてそう考えたのか聞いてみよう。」と投げかけ、考えのずれを大切にした学びを工夫しました。その時には、「〇〇さんのおかげで、同じ考えの人が納得したよ。」「〇〇さんの説明で、より分かりやすくなったね。」など、学び合いの後には、全員が納得する時間になるようにしました。

『お手紙』の学習では、「なぜ、ここがお気に入りなの。」「このようにペープサートを動かすと、どうしていいのかな。」など、考えの違いを生かした学習をすることができました。

考えのずれのある話し合い活動では、常に「似た考えの人を見つけて、教えてもらうといいよ。」と伝えてきました。次第に、似た考えの子の意見を聞こうと、自然に指名し合う姿が見られるようになってきました。

学び合いを実感する授業作り

以上３点の取組により、より深い学び合いができるようになってきました。授業の楽しいところを聞くと「自分もそうかと思って、教えてもらえる。」という意見が出されました。子どもの名前が沢山出てくる、周りの友達と比べながら聞く学習の喜びが体感できる授業になってきていると思います。今後も、子どもたちの考えや思いを把握し、学び合う子どもの育成を目指して、日々研修に努めていきたいです。

３次構成で目的意識をもった学びを作る
～国語科単元構想の工夫～

原田小学校　花嶋　留美子

自分自身の学びにするために、何を身に付けるための学習かを理解して学習を進める

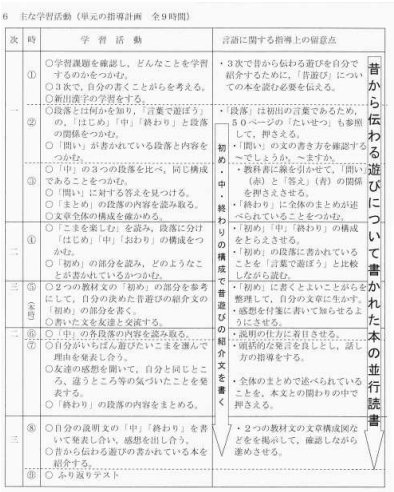
「国語の学習が好き。」という子どもは多くありません。これは原田小学校でもいえることです。「何が書かれているのかよく分からないから読みたくない。」という子もいれば、「何で文を読んでいろいろ考えなければいけないのか。」「何のためにやっているのかわからない。」という子もいます。本校では、国語の学習に意欲をもてない理由の一つは、子どもが「できた・わかった」の実感をもちにくいからではないかと考えました。そこで、子ども自身が学習のねらいと学習で身に付ける力を分かった上で授業に臨むように単元構想を立て、学習を通して自分に付いた力を実感できるような授業づくりに取り組みました。

単元を貫く言語活動、単元を貫く目標を明示する

単元を、１次、２次、３次で構成し、３次では２次で学んだ教材文での学習を一歩進めた言語活動を行うことにしました。

１次	学習の見通し（単元の目標とゴールとなる活動を知る。）
２次	付けたい力を意識して、教材文で学ぶ。
３次	２次で学んだことを活用して、言語活動を行い、力を付ける。

単元構想図



6　主な学習活動（単元の指導計画　全９時間）

次	時	学習活動	言語に関する指導上の留意点
一	①	○学習課題を確認し，どんなことを学習するのかをつかむ。 ○３次で，自分の書くことがらを考える。 ○新出漢字の学習をする。	・３次で昔から伝わる遊びを自分で紹介するために，「昔遊び」についての本を読む必要を伝える。
	②	○段落とは何かを知り，「言葉で遊ぼう」の，「はじめ」「中」「終わり」と段落の関係をつかむ。 ○「問い」が書かれている段落と内容をつかむ。	・「段落」は初出の言葉であるため，５０ページの「たいせつ」も参照して，押さえる。 ・「問い」の文の書き方を確認する。～でしょうか。～ますか。
	③	○「中」の３つの段落を比べ，同じ構成であることをつかむ。 ○「問い」に対する答えを見つける。 ○「まとめ」の段落の内容を読み取る。 ○文章全体の構成を確かめる。	・教科書に線を引かせて，「問い」（赤）と「答え」（青）の関係を押さえさせる。 ・「終わり」に全体のまとめが述べられていることをつかむ。
二	④	○「こまを楽しむ」を読み，段落に分け「はじめ」「中」「おわり」の構成をつかむ。 ○「初め」の部分を読み，どのようなことが書かれているかつかむ。	・「初め」「中」「終わり」の構成をとらえさせる。 ・「初め」の段落に書かれていることを「言葉で遊ぼう」と比較しながら読む。
三	⑤（本時）	○２つの教材文の「初め」の部分を参考にして，自分の決めた昔遊びの紹介文の「初め」の部分を書く。 ○書いた文を友達と交流する。	・「初め」に書くとよいことがらを整理して，自分の文章に生かす。 ・感想を付箋に書いて知らせるようにさせる。
	⑥	○「中」の各段落の内容を読み取る。	・説明の仕方に着目させる。
	⑦	○自分がいちばん遊びたいこまを選んで理由を発表し合う。 ○友達の感想を聞いて，自分と同じところ，違うところ等の気づいたことを発表する。 ○「終わり」の段落の内容をまとめる。	・説話的な発言を良しとし，話し方の指導をする。 ・全体のまとめで述べられていることを，本文との関わりの中で押さえる。
三	⑧	○自分の説明文の「中」「終わり」を書いて発表し合い，感想を出し合う。 ○昔から伝わる遊びの書かれている本を紹介する。	・２つの教材文の文章構成図などをを掲示して，確認しながら進めさせる。
	⑨	○ふり返りテスト	

初め・中・終わりの構成で昔遊びの紹介文を書く

昔から伝わる遊びについて書かれた本の並行読書

この３次構成を効果的に進めるためには、１次で子どもの興味関心を高める「仕掛け」を大切にすること、３次の活動を支える並行読書、３次につながる２次の指導が大切になります。１次で子どもに学びのゴールの姿をイメージさせるためには、教師のより計画的な準備が必要になりました。

また、国語科での３次構成を行うにつけて、本校では以下の点について学校全体で取り組むことを共通理解しました。

- 単元を貫く目標を学習中、常に掲示する。（赤２重線で囲む）
- 本時の目標は赤１重線で囲み、板書する。
- 掲示やプリントを活用して、単元を通した学習の予定を子どもが分かり見通しがもてるようにする。
- 学習の足跡が分かるように、教室内に今までの授業を思い出せる掲示をする。

３次構成の実践例（３年生）

①単元名「まとまりを捉えて読み、遊びを紹介する文を書こう」

書いた紹介文を読み合う

本単元では、付けたい力を、**「段落」について知り、「初め」「中」「終わり」の文章構成や、それぞれの段落の内容をとらえる**と設定しました。

そして、単元を貫く言語活動は、**昔遊びを紹介しよう（昔遊びを紹介する文章を書く。）**としました。

教材文を文章構成やつなぎ言葉の使い方に注目して読み取った後、自分で紹介文を書いていきました。教材文が良い手本となり、「初め・中・終わり」に合った紹介文を書くことができました。

「こうすればわかりやすい文を書くことができる。」という手応えを感じて、「このごろ国語が得意になったかもしれない。」という感想をもった子どもも多かったです。ただの読み取りだけで終わらないことで子どもの意欲を喚起し、力を付けることができました。

②単元名「学級の活動を伝える放送をしよう」

放送室で放送中

この単元では、「話すこと・聞くこと」を指導の中心にした。付けたい力を、**「互いの考えの違いや共通点を整理し、司会や提案などの役割を果たしながら話し合うことができる」**としました。そのための単元を貫く言語活動は、**「学級活動の様子をお昼の放送で全校に知らせよう」**にした。話し合いの進め方を教材を活用して学んだ後、自分たちは何をどう全校に発信するかを話し合いました。

活動のゴールがイメージできているため、役割を意識しながら話し合いに進んで参加し、意見交換を行う姿が見られました。

国語が好き。国語が「できる・わかる」という子どもを増やしていくために

３次構成を取り入れることで、主体的に学習にかかわる子どもの姿を多く見ることができました。言語活動によって形として学習の成果が子ども自身に見えることが、「できる・わかる」という実感を生み、「国語が楽しい。」という子どもを増やすことつながりました。今後は、言語活動の質を上げていくために、その元となる教材文を使った２次の指導をより充実させていく必要があります。

子ども自身が学びの実感をもてる国語学習を目指して実践を積み重ねていきたいです。

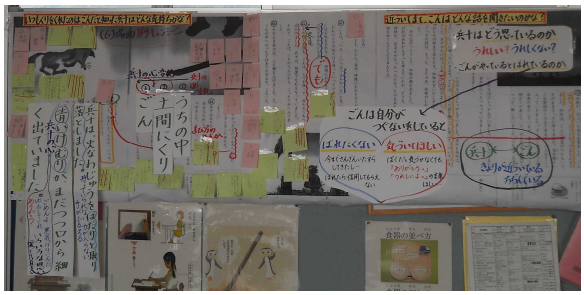
自分の考えを持つ・練る・伝える・まとめる

西郷小学校　児玉　侑香

クラスの子ども達は、好奇心旺盛で活発です。子ども達が授業にのると、教師の予想以上の考えが飛び出し、とても面白いです。その一方で、語彙力が乏しいため、自分の考えを分かりやすく話したり、書いたりすることは苦手です。そこで、「考えたくなる」「話したくなる」「まとめたくなる」授業にするための手立てを考えました。

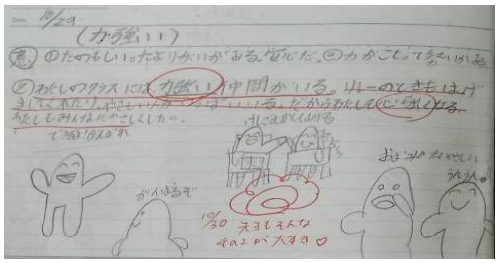
1　考えたくなる授業にするためのしかけ

国語『ごんぎつね』では、ごんがどんなきつねか考えさせるために、文を掲示しました。「その中山からすこしはなれた山の中に、「ごんぎつね」という**おそろしい**きつねがいました。」というしかけ文です。普段読み慣れている本文なので、違和感をすぐ感じ取った子ども達は、「おそろしいわけじゃなくて、やんちゃなだけなんだよ。」「そんなに悪いきつねじゃないよ。」等と反応を返してきました。しかけの語句を挿入した文を掲示することで、ごんについてより考えようという気持ちが出ました。また、全文を印刷し壁に掲示しました。胸キュンシーンを見つけようと呼びかけ、一番胸キュンしたシーンとみんなで考えたいことを付箋に書き、全文に貼りました。これにより一目で一番胸キュンしたシーンが分かり、そのシーンを山場としようという見通しを持つことができたと同時に、子ども達も初発の感想をノートに書くという取り組みではなかったので、新しい試みに楽しんで取り組んでいました。



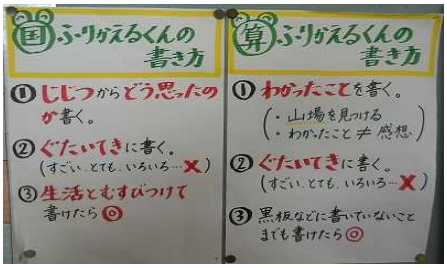
2　語彙を増やすための工夫

様々な反応を返し、意欲的に取り組もうとする子ども達です。でも、自分の考えを分かりやすく話したり書いたりすることが苦手な子ども達にとっては、語彙力を増やすことが必要だと考えました。国語の教科書にある「言葉の宝箱」から言葉の短冊を作り、毎日お題になった言葉を辞書で引き意味を調べ、短文を作る実践を行いました。すると、以前お題になった言葉も併用して短文を作る子も出てきたり、短文作りで出てきた言葉が教科書に出てくると、「これ、短文作りで出てきたよね。」「意味は～だったよ。」などと発言したりするなど、語

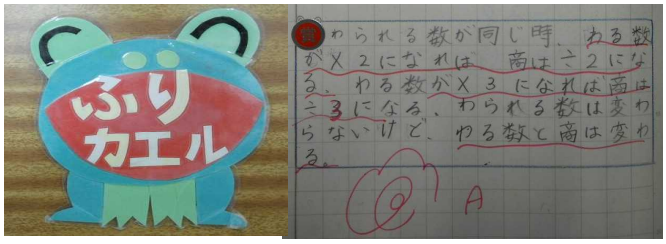


彙にこだわって話したり書いたりすることが少しずつできてきました。

３　楽しんでわかったことをまとめる

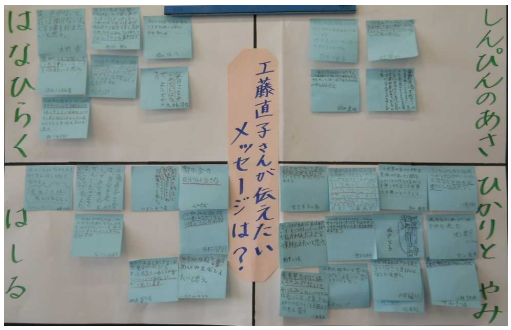


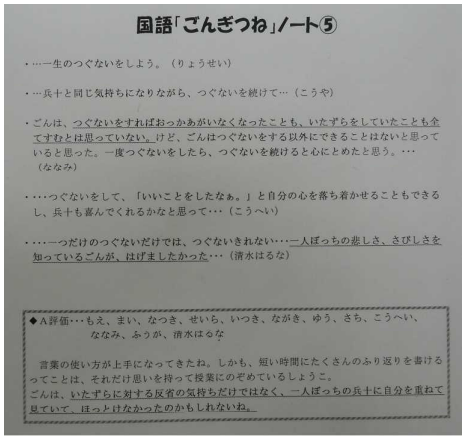
意欲的に授業に取り組み、語彙にこだわろうという姿も現れ始めました。そこで、自分の考えや一時間の学びを分かりやすく、楽しくまとめるための手立てを取りました。まず、ノートにまとめる際どんなことに気をつけて書くのかを提示し、楽しく書くために「ふりかえる君」の実践を行いました。



まとめの時間になると、ふりかえる君と名付けたキャラクターの磁石を貼ります。そして子ども達に丸いシールを配り、それをカエルに変身させます。シールの色を当番に選ばせるなど、楽しんで書く事ができました。

２つ目は、バリエーションの工夫です。出だし、キーワード、字数の指定の他にも、ノート以外にも付箋やリーフレットを用いるなど、本時の内容を考慮したまとめを提示しました。「今日は出だしの指定がいいな～」等と、子どもからの声も聞かれるようになりました。まとめをワンパターンにしないことで、いつも新鮮な気持ちでまとめを書くことができました。





国語「ごんぎつね」ノート⑤

・…一生のつぐないをしよう。（りょうせい）

・…兵十と同じ気持ちになりながら、つぐないを続けて…（こうや）

・ごんは、つぐないをすればおっかあがいなくなったことも、いたずらをしていたことも全てすむとは思っていない。けど、ごんはつぐないをする以外にできることはないと思っていると思った。一度つぐないをしたら、つぐないを続けると心にとめたと思う。…（ななみ）

・…つぐないをして、「いいことをしたなぁ。」と自分の心を落ち着かせることもできるし、兵十も喜んでくれるかなと思って…（こうへい）

・…一つだけのつぐないだけでは、つぐないきれない…一人ぼっちの悲しさ、さびしさを知っているごんが、はげましたかった…（清水はるな）

◆A評価…もえ、まい、なつき、せいら、いつき、ながき、ゆう、さち、こうへい、ななみ、ふうか、清水はるな

言葉の使い方が上手になってきたね。しかも、短い時間にたくさんのふり返りを書けるってことは、それだけ思いを持って授業にのぞめているしょうこ。
ごんは、いたずらに対する反省の気持ちだけではなく、一人ぼっちの兵十に自分を重ねて見ていて、ほっとけなかったのかもしれないね。

３つ目は、教師の見取りです。まとめをシールで評価したり、いいまとめをプリントアウトしたりして、フィードバックしました。国語『ごんぎつね』３場面では、償いを続けるごんの心情を追いました。いたずらに対する反省の気持ちからだけではなく、一人ぼっちの兵十に自分を重ねて放っておけなかった気持ちを書いているノートをＡ評価にしました。子ども達は「名前のった～！」「〇〇さん、最近名前のるね、すごいじゃん！」などの声も聞かれ、更に意欲を持ってまとめることができました。今後も、「考えたい」「話したい」「まとめたい」授業を構築し続けていきたいと思います。

「説明する力」を高めるＩＣＴ機器活用

倉真小学校　法月　淳

「説明する力を身につけた子」の育成

本校は昨年度から２年間、掛川市教育委員会指定で「ＩＣＴ活用研究」を進めてきました。研究主題は「『説明する力を身につけた子』の育成～ＩＣＴ機器の効果的な活用を通して～」です。

「説明する力を身につけた子」の高学年の具体的な姿は「集団を意識し、根拠を示しながら分かりやすく伝えるために思考力・判断力・表現力の３つの力を相乗的に活用して説明することができる子」と設定しました。

私が本年度担当した５年生は昨年度、ＩＣＴ機器を活用して説明する活動経験を数多く積み「説明する力」を高めてきました。そこで本年度は、説明する姿を客観視し修正することで、これまで身につけた「説明する力」を自分自身でさらに高めることができるだろうという仮説を設定しました。そして、ＩＣＴ機器を活用することによって、より効果的に自分の説明する姿を振り返り、修正する活動を行うことができると考えました。

説明するにはまず「話す・聴く力」から

５年国語科「きいて、きいて、きいてみよう」は、インタビュー活動を通して、話す力と聴く力を高めることを目指す単元です。まずこの単元で、ＩＣＴ機器を活用し、インタビューの様子を客観視し修正する活動を計画しました。

３～４人の小グループに１台ずつタブレット端末を用意し、インタビューの様子を子ども同士で撮影し合いました。動画を根拠に小グループやクラス全員でインタビューの様子を評価検討し合うことで、話し方や聴き方、視線など、自分の話す力と聴く力の現状を客観視でき、多くのことに気付くことができました。この撮影と評価検討を繰り返すことで、よりよいインタビューへ修正することができました。

自分のインタビューを自分で説明

タブレット端末でインタビュー撮影

「話す・聴く力」から「説明する力」へ

「きいて、きいて、きいてみよう」で培った話す力と聴く力をもとに、次は「説明する力」を高める方法を模索しました。その単元構想を考える頃、外部の研修会でビブリオバトルを言語活動として取り入れた研究実践と出会いました。ビブリオバトルは「説明する力」を自発的に高めたくなる活動として有効であると判断し、この単元の中に取り入れることとしました。

本を紹介する様子を撮影

５年国語科「すいせんします」は、説得力のある文章構成を考え、スピーチする活動を通して、話す力と聴く力を高めることを目指す単元です。この単元の言語活動としてビブリオバトルを導入し、ＩＣＴ機器を活用してスピーチの様子を客観視し修正する活動を計画しました。

動画を小グループで確認

「きいて、きいて、きいてみよう」同様、３～４人の小グループに１台ずつタブレット端末を用意し、スピーチの様子を子ども同士で撮影し合いました。子どもたちはこれまでの経験を生かし、意欲的に活動に取り組みました。

動画を元に評価検討

本単元では、聞き手に思いが伝わる話し方に加えて、思いが伝わる資料の内容や、本や資料の効果的な提示方法など、説明するために必要な多くの要素について、自分たちの様子を動画で確認しながら活発に評価検討し合うことができました。よりよいスピーチにするために繰り返し撮影と評価検討を行う様子はまさに「説明する力」を、自分自身で高めようとする姿そのものでした。

「説明する姿」を自分で見てみよう

ＩＣＴ機器を活用して説明する姿を客観視し修正する活動は「説明する力」を自分自身で高めるためにとても有効な手立てでした。その大きな要因は、自分が説明する姿を自分で見たことであると私は考えます。また、自分の説明する姿を自分で見ることは、私たち教員の授業力を高める有効な手立てにもなることでしょう。

子どもも教員も「説明する力」を高めるために、まず、自分の説明する姿を自分で見てみることをお勧めします。ＩＣＴ機器は、自分自身を見つめ直すことにたいへん有効です。

「じっくり学ぶ子」の花を咲かせよう

土方小学校　鴨川　智香子

「じっくり学ぶ子」の花を咲かせるために

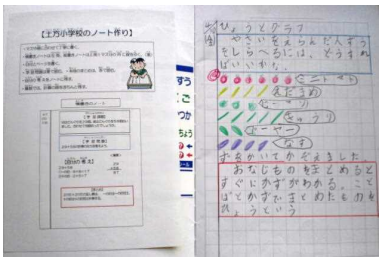
平成27年度の教育課程編成において、土方小の子どもたちの「じっくり学ぶ子」の姿を「意欲をもって粘り強く学ぶ子」と捉えました。

本校の我が校ものがたりでは、「じっくり学ぶ子」を花に例え、花を咲かせるための成長過程「①土壌づくり・種蒔き　②芽吹き・成長　③開花」をものがたりとして展開していきました。

「土壌づくり・種蒔き」の期

「土壌づくり」では、一人一人が安心して学校生活を送り、自分の力を思い切り発揮できる環境をつくっていきました。そのために、全学年が「土方小学校学びの約束・ルール」を活用して、支持的風土の醸成と居場所づくりを大切にしました。

特に、「時間がきたら、黙って席に着く。」「机の上を整理して学習する。」「ノートの使い方を身に付ける。」「次の時間の学習の準備をしてから休み時間にする。」の約束・ルールは、全員が守れるように繰り返し指導をしました。



「ノートの使い方を身に付ける。」では、「土方小学校のノート作り」というプリントを用意し、全員のノートの裏表紙に貼って、いつでも見返すことができるようにしました。

「種蒔き」では、「じっくり学ぶ子」とは、学級開きや授業開きで、教師と子どもたちの出会いを大切にしつつ、１年後の具体的な姿を示し、「じっくり学ぶ子」のイメージを子どもたちと教師が共有しました。

子どもたちと「じっくり学ぶ子」とはどんな姿かを想像すると「自分の考えをノートにまとめる。」「進んで発表をする。」「友達の考えを聞いて反応する。」など、１年後の姿としては「学年で学習したことができる・わかるようになりたい。」「難しい問題でもあきらめないでやり切る力を付けたい。」などの意見があがりました。最初に「じっくり学ぶ子」をイメージすることで、今の自分たちはどこまでできているのかを確認し合うことができました。

「芽吹き・成長」の期

芽が出た後、成長に必要なものは、「日光」と「水」です。植物の成長を促す「日光」は「日々の授業改善」、成長のために自ら吸収する「水」は「学習スキル」となります。

「日々の授業改善」としては、ユニバーサルデザインの一つとして取り入れている見通し黒板を活用しました。一時間の授業の流れをホワイトボードに書いておくことで、子どもたちが今日はどんなことをやるのか見通したり、教師が時間に気を付けて授業を行ったりすることができました。

また、「押さえる・仕掛ける・確かめる」を意識して授業を行いました。

算数の「体積」の授業では、子どもたちが課題を解決できるように、紙の箱やスポンジ、同じ大きさの容器などの具体物を用意することで、自然に考えたくなるように仕掛けました。

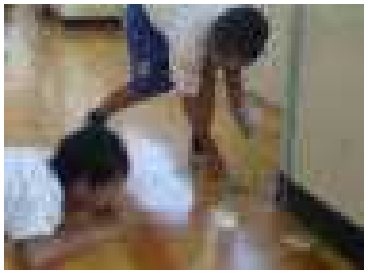
「学習スキル」としては、「土方小学校学びの約束・ルール」や「話す聞く書くの名人表」を活用したり、「土方小日記」や「ノート展」などを行ったりすることで学びの基礎・基本を身に付けました。

「開花」の期

「①土壌づくり・種蒔き、②芽吹き・成長」を経て、子どもたちは次のような花を咲かせました。

「課題を解決しようと真剣に取り組む子」「最後まであきらめずに追究する子」「自分の考えを友達に一生懸命伝える子」「交流を通して自分の考えを高める子」など、様々な花がたくさん咲きました。

これからも、土方小の子どもたち一人一人が「意欲をもって粘り強く学ぶ子」となるよう全職員と家庭と地域が連携して、力を合わせて取り組んでいきます。



板書で分かる、「聴く」ことで助け合う、授業づくり

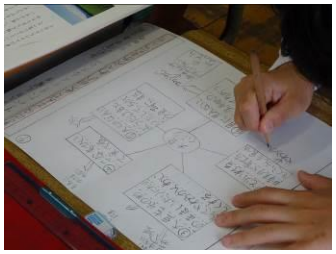
佐東小学校　林　星菜

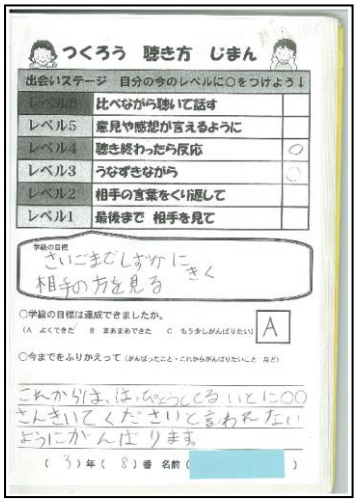
明るく、自分の思いを伝えることが大好きな学級

佐東小の３年生は、男子１６人、女子１６人、世話好きの児童が多い、元気な学級です。正義感の強い子、素直で前向きな子、負けず嫌いな子も多く、やる気いっぱいで、自分の考えを主張できる子が大勢います。しかしながら、授業での発表者には偏りが見られ、分かる児童の発言で授業が進み、学習の苦手な児童は置いていかれてしまうということも多かったです。また、相手の発言を最後まで聞かず自分の言いたいことを話してしまうため、落ち着かない雰囲気もありました。

シンプルな「板書」、「聴く」意識を大切に

学習の苦手な児童もついていける授業にするために、ひと目で１時間の授業の内容が分かるような「板書」を心掛けました。「板書」する際、特に気を付けたことは、キーワードを黄色で示すことと、課題とまとめの言葉の精選です。学習課題が「問い」であり、まとめが「答え」になることを大切にし、言葉を必要最低限にして、シンプルな板書を目指しました。また、文字の大きさにも大小をつけ、大切な言葉が際立つよう工夫しました。それによって、まとめを書く時間には、「あの言葉が大切なんだよ。」「あの言葉をつなげればまとめが書けるね。」とつぶやく児童も増えました。




つくろう　聴き方　じまん

出会いステージ　自分の今のレベルに○をつけよう！		
レベル6	比べながら聴いて話す	
レベル5	意見や感想が言えるように	
レベル4	聴き終わったら反応	○
レベル3	うなずきながら	○
レベル2	相手の言葉をくり返して	
レベル1	最後まで　相手を見て	

学級の目標
さいごまでしずかにきく
相手の方を見る

○学級の目標は達成できましたか。
（A　よくできた　B　まあまあできた　C　もう少しがんばりたい）　A

○今までをふりかえって（がんばったこと・これからがんばりたいこと　など）

これからは、はっぴょうしてるいとに○○さんきいてくださいと言われないようにがんばります。

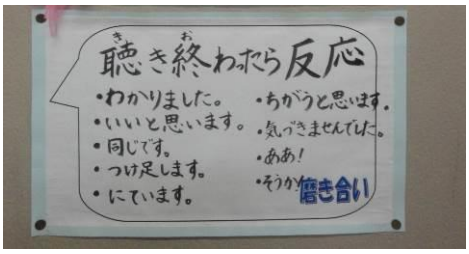
（３）年（８）番　名前（　　）

また、落ち着いて相手の言葉を「聴く」意識を高めるために、「はい。言ってもいいですか。」と発表するときの決まり文句を決め、全員が発表者の方を見るまで話し始めないことの徹底を図りました。教師が話をするときも、全員が集中するまで待つことを徹底しました。そして、聴き方レベル表も活用し、自分が今どのレベルにいるのかの価値付けも行いました。全員を待てるようになるまでには時間がかかったが、それができるようになると落ち着いた雰囲気になり、集中力も増しました。しかし、発表する児童は、以前と変わらず同じ児童であることが課題でした。

発表あふれる授業を目指して

そこで、全員が発表して話し合いに参加し、分かったと実感できるようにするために、「全員発表」を学級のめあてに掲げ、それに向かって様々な取組を行いました。一つ目は、生活班ごとに発表の回数を競うことです。二つ目は、話し方の上手な児童をその場で称賛したり、学級便りに載せたりするなど褒めることを大切にしたことです。そして、三つ目は、簡単な問いかけで誰でも発表できるような場面を授業に設定したことです。このような取組を行い、進んで発表したくなるよう工夫しました。

負けず嫌いの子が多いこの学級では、これらの取組が児童のやる気に火を付けました。今まで恥ずかしがって発表できなかった児童も、やる気いっぱいの目で手を挙げるようになりました。また、「似ています。」「言い方が違います。」「付け足します。」「助けます。」などの言葉を使って反応し、発表の機会を探して、意欲的に発表する姿も増えました。更に、子どもたち同士で発表を繋ぐ姿も見られるようになりました。



助け合う授業・今後の課題

「聴く」ことから繋がった話し合い。今では、わからない子が素直にわからないとつぶやけるようになりました。それは、つぶやくと誰かが必ず「助けます。」と言って発表し、助けてくれるからではないかと思います。教師がつい答えを言いそうになると、「私が言うよ。」と、子どもたちが説明する授業となりました。

そのような話し合いが成立するようになり、痛感することは、授業を組織する難しさです。わからない児童も頼りにできるようにするために取り組んだ板書。あらかじめ板書を計画することで児童が付けたい力から外れていることを感じ、修正しなければと思うことはできました。しかし、児童の生き生きした発言の中から、大切な言葉を選び、まとめへと舵をとることが難しく、なかなかできませんでした。

今後は、「聴く」を基本にした授業づくりと、付けたい力を明確にした教師の舵取り(切り返しの発問)を大切にして、児童が児童の力でつくる授業を目指したいです。また、児童が自分たちで学びたいと思える課題であってこそ成り立つ話し合いであるため、「学びたい」と思えるような課題とは何なのかをよく練ることも大切にしていきたいです。

「できた」「わかった」がいっぱいの授業を目指して

中小学校　増田　七奈子

「ショーウインドウって何だろう。」

５年生の国語「大造じいさんとガン」の学習。ここで身に付けさせたい力と、目の前にいる子どもたちの実態、物語文「大造じいさんとガン」の持つ力を考え、「すぐれた表現に着目して、物語の魅力をショーウインドウで紹介しよう」という目標を立てました。本のショーウインドウは、作品のおすすめの場面やあらすじなどを項目ごとに書いていき、子どもたち一人一人が本を紹介するものです。

単元の始めに、４年生で学習した「ごんぎつね」を使って私がショーウインドウで物語の紹介をしました。子どもたちは、「ショーウインドウとは何か」イメージを持つことができ、今後の学習の見通しを持つことができました。

教師のショーウインドウ

本のショーウインドウを、毎時間部分ごとにカードに書き込んでいくことで、ゴールに向かう目的意識を持ち続けることができました。それは、学びたい考えたいという意欲にもつながりました。

「優れた表現ってどんなもの？」

優れた表現を見つけることは、難しいことです。優れた表現とは、人物の言葉や行動、そのときの人物の様子、場所の様子などが、目に見え、耳に聞こえるように生き生きと描かれた表現のことです。

大造じいさんとガンの心情や姿が伝わってくる表現は全て「優れている」ととらえたり、文全体から大まかにとらえたりするのでは、優れた表現に着目しているとはいえません。だからこそ、教師がどのような手立てを考え、どう仕掛けていくかが重要となります。登場人物の相互関係を正しくとらえる、どのような優れた表現を探すのか視点をしぼる、その言葉がない文とある文とではどのような違いがあるか比較をさせることで、一つ一つの言葉にこだわりを持つことができるようになってきました。

優れた表現を見つけようとする子ども

「ただ救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけ」

子どものショーウインドウ

「『ただ～だけ。』という言葉は、残雪の目には人間もハヤブサもない、それしかないことが伝わってくる。」「それだけ仲間のことしか考えていない。仲間に対する思いを感じさせる。」

これは、子どもたちの発言です。

子どもたちは、まずは自分で優れた表現を探しました。そして、理由を話し合いました。どの言葉から優れていると感じるのかそう思う理由を交流することで、徐々に優れた表現を自分の力で見つけることができるようになりました。そしてそれが、子どもたちの「できた」「わかった」につながっていきました。また、自分の読みを確かなものにすると同時に、友だちの感じ方にもふれることができました。

「国語がおもしろい」

子どもたちは、「すぐれた表現に着目して、物語の魅力をショーウインドウで紹介しよう」という目標に向けて、「今日も優れた表現を見つけよう。」「どんな表現がショーウインドウに載せられるかな。」と意欲的に学習に取り組みました。そして、友達と発表し合いながら、自分の考えを深めていける国語の授業が「おもしろい」と笑顔で話す子どももいました。

本年度、本校では「できた」「わかった」がいっぱいの授業を目指してきました。そのために、まず、子どもたちにつけたい力は何かをはっきりとさせ、子どもたちと教師とが共有しました。また、単元を貫く言語活動を設定し、付けたい力に迫ってきました。そして、学習問題、板書、個への支援等、目の前にいる子どもたちの実態に応じて工夫し、まとめと振り返りの時間を確保することで、子どもたちは「できた」「わかった」の達成感を積み重ねることができたと思います。

今後も子どもたちの学力の向上に向けて、進んで学ぶ子を育て、「できた」「わかった」がいっぱいの授業づくりを進めたいと思います。

ショーウインドウで紹介し合う子ども

「できた！」「わかった！」を実感し、進んで学び合う子の育成

大坂小学校　曽根　隆央

何をしたらよいのか・・・

本校の研修テーマ「『できた！』『わかった！』を実感し、進んで学び合う子の育成」に向けて、何から取り組んでいこうか。４月に５年雪組の児童を前にして考えていました。勉強を好きになって欲しいし、積極的に学んで欲しい。私は、先輩の先生方からアドバイスをいただいたり、本を読んで勉強したりするなどして、次のことを実践していきました。

学 習 環 境 作 り

まず、「できた！」「わかった！」を実感し、進んで学び合うためには、安心して学習できる環境が必要だと思いました。①クラスの仲間と同時に学習課題に取り組めること、②自分の発表を仲間が聞いて反応してくれること、③迷うことなく授業のふり返りを書けること、の３つのことを大切にする。基本的なことではありますが、これら３つの基本をクラス全員ができていることで、「できた！」「わかった！」を実感し、進んで学び合うことができると考えました。

初めに、学習課題を書くときは、先に教師から課題を口頭で伝え、見通しを持たせてから書くようにしました。こうすることで、２８人全員が同時に学習課題を書くことができ、同時に課題に取り組めるようになりました。

次に、「いいです。」「わかりました。」などの決まった言葉を言うだけではなく、うなずいたり５年雪組だけのハンドサインを作ったりするなどして、反応する側にいくつかの選択肢を与えました。その結果、多くの児童が反応できるようになり、発表する児童が増えてきました。

最後に、板書に使うチョークの色を工夫しました。赤色のチョークは絶対に覚えてほしいこと、黄色のチョークは大切なことと教え、ふり返りでは赤色と黄色のチョークで書かれたことを中心に書くようにしてきました。すると、２８人全員がふり返りを自分の言葉で書くことができるようになりました。

教室では、仲間との学び合いを大切にしてきました。三人寄れば文殊の知恵と言いますが、一人では解決しないことも、友だちと一緒に考えれば解決することがあります。そこで、１時間の授業の中で、必ず隣の席や班の友だちと話す機会を設けました。話す機会だけではおしゃべりになってしまうので、話し合いの仕方も改めて教えました。話をする人は、文を短くして聞く人に分かりやすくすること、聞く

人はメモを取りながら自分の考えと似ているところや違うところを探しながら聞くことなど・・・。すると、初めはとまどっていましたが、段々と慣れていき、今では課題を与えると周りの友だちと解決に向けて進んで話し合うようになりました。

周りの友だちと話し合った考えを発表するので、自信を持って発表することができ、つけ足しや質問が多く出るようになりました。

一 番 大 切 な こ と

一年の前半は学習環境作りに取り組んできましたが、やはり一番大切なことは授業そのものの内容です。児童が進んで課題に取り組むためには、課題の分かりやすさが大切だと考えました。本校では、学習課題のあとに追求課題があり、追求課題で児童の考えを深めます。この追求課題をいかに分かりやすくするかにこだわりました。

算数の『小数のわり算』では、「２．５Ｌのジュースを０．８Ｌずつ水とうに入れます。ジュースが０．８Ｌ入った水とうは何本できて、ジュースは何Ｌあまるでしょうか。」というあまりを求める問題に対して、「あまりは１Ｌか０．１Ｌのどっちだろう。」という追求課題を設定しました。分かりやすい課題なので、すぐに取りかかることができ、活発な話し合いに繋がりました。

また、授業での学びを定着させるために、算数では授業の終わりに類似問題を解くことをふり返りとしました。先ほどの学習課題でのふり返りでは、「ＬをｄＬに直す」「図を使う」「たしかめ算」の３つの考え方が予想できたので、段階に応じたヒントカードを用意しました。児童の理解度に合わせたヒントカードがあるので学級全員が問題を解くことができ、学びを定着させることができました。

一 年 間 で 分 か っ た こ と

４月から、本校の研修テーマに向けて一生懸命取り組んできました。一年間、５年雪組の２８人と向き合ってきてわかったことは、どの児童も「『できた！』『わかった！』を実感して進んで学び合いたいと思っている」ことです。授業に対して消極的な児童も、「できなくていい」「わからなくていい」とは思っていません。今年度、研修を通して、授業づくりと授業環境づくりの両方が大切だと分かりました。「できた！」「わかった！」につながる研修の両輪として、これからも研修に励みたいと思います。

問題解決過程において、進んで自分の考えを伝える子どもの育成～理科～

千浜小学校　鈴木　純子

子供の実態と今の理科学習に求められているもの

本校の４年１組の児童は、理科が好きで、観察・実験も意欲的に行います。しかし、結果を整理してわかったことを書いたり、学習した内容を日常生活の様々な場面に適用して説明したりすることが苦手な子が多く、また、予想からどんな実験をすればよいかを考える力も弱いです。前述の課題は、平成２４年度全国学力状況調査の分析結果「観察・実験の結果を整理し考察すること、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりすることに課題がある。」と共通しています。そこで、問題解決の過程において、予想や仮設を持つ段階、結果からわかったことを書く段階、日常生活において科学的な見方や考え方を養う（結論の導出）段階の３つの段階において子どもたちが進んで自分の考えを伝えられように実践したことを述べます。

手立てと工夫

「ものの体積と温度」の単元を例にとり、具体的な手立てについて書きます。

① 予想や見通しの段階での手立て

・子どもたちが考えやすい現象を用いて課題を持たせる。

（例）空気と温度→フラスコの栓が飛ぶマジック

・そう考えた理由も書かせて、実験方法に結び付ける。

② 結果から考察段階での手立て

・理科の用語「体積」「温度」などをキーワードにしてまとめさせる。

・学習問題に戻って考えさせる。

③ 結論の導出段階での手立て

・日常生活の場面に置き換えて考えさせる。

（例）へこんだピンポン玉を元に戻す方法はないかな。

・学んだことをものづくりに生かす。

（例）温度計を作ろう。

④ 考えや説明はノートに書かせて、交流をさせる。

⑤ 言葉だけではなく、イメージ図などを使って伝える。

④と⑤は、他教科でも実践をしてきました。

実践での成果と問題点

子どもたちは、理科だけではなく他教科でも自分の考えに自信をもって伝えられるようになりました。後期に入り、ほとんど毎日全員発表をしています。考えが持てなかったり、説明ができなかったりする子も交流をすることで、友達から学んだり、また、同じ意見を聞くことによって自信がもてたり、違う考えの人と交流することによって考えが深まったりしました。また、言葉でうまく説明ができないときもイメージ図などを用い、伝え方や表し方のバリエーションが広がりました。（写真１）そして、伝えたい気持ちが高まると同時に聞く力もついてきたと感じます。

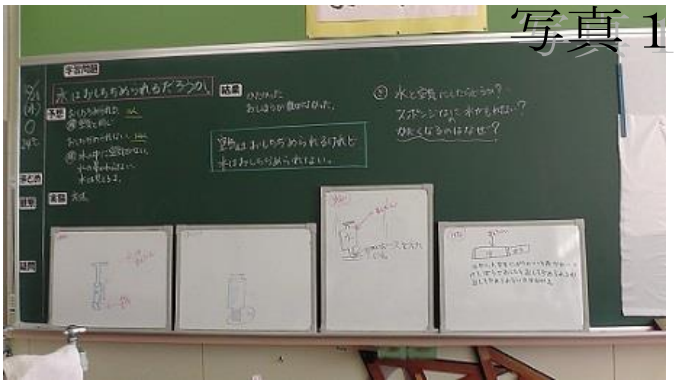


写真１

また、問題意識や結論の導出を身近な現象にすることで、理科学習が自分たちの日常生活の中にあることを実感し、理科の勉強を身近に感じるとともに理科ってすごいとふりかえりに書く児童が多くなりました。４月に「伝えることが苦手」と答えた児童が５人いましたが12月のアンケートでは０人になりました。

しかし、学んだ時間には学習した科学的な言葉や概念を使って事象を説明できてもしばらくすると忘れてしまい、理科の用語で説明することができなくなるので、国語や算数のようにワークシートなどで繰り返し「知識・理解」を、習得させて中学理科へとつなげる必要があります。

こ れ か ら

理科学習について研修していく中で、理科も国語のように単元を貫く課題（ゴール）を示し、見通しを持って学習していくことが大切であるとわかりました。ゴールを意識しながら学習を進めていくことで目的をもって学習に臨め、自分たちが何に向かっているのかを意識しながら学習を進めていけるからです。また、子どもの思考に添った単元構想を立てて授業を進めていくことも前述の指導と合わせてこれから実践していきたいです。

子どもたちがきらきらした目で授業にのぞんでいる姿を見ると、とても嬉しく、もっと研修をして子どもたちを高めたいという意欲が湧いてきます。

しっかり聞き、はっきり話し、考えを深め合う子の育成

横須賀小学校　細川剛男、堀田高弘、藤田真智子、竹内洋介、西尾愛美

しっかり聞き、はっきり話せるために・・・

子どもたちは、全体の前で話す際、聞き手を意識せずに一方的に話してしまったり、全体での話を聞く際には、話を自分のこととして受け止められなかったりしてしまっています。これは、みんなで学びを深めていこうという意識が低いことによる表れです。

そこで、自分たちで学びを深め合おうとする意識を高めるとともに、そのための言動の仕方を身に付けさせようと考えました。

これをコミュニケーション能力という観点で捉えると、その力の要素を「伝える力」「受ける力」「つながる力」を３つとして押さえ、「つながる力」を伸ばすことを中核にして、「伝える力」と「受ける力」を伸ばしていくという展開です。

「つながる」「伝える」「受ける」という観点に立った働きかけ

まず、自分がわかればよいのではなく、みんながわかることを常に目指すようにさせました。わからないで困っている子の気持ちを伝えたり、自分の考えを一生懸命伝えている子を褒めたり、教えてもらってわかるようになった子の教えてくれた子へ対する感謝の気持ちを伝えたりして、「つながる」ことへの動機づけを図りました。同時に、「わからない」や「ちがう」ということに不安を抱かないように、みんなで大切にして、気軽に「わからない」や「ちがう」ということが言えると雰囲気をつくらせていきました。

そして、その中で「伝え手」及び「受け手」としての意識を芽生えさせ、どのような言動をとればいいのか、場面に応じて実践的に考えさせていきました。子どもたちは、当該事象について理解している子とそうでない子に分けられますが、前者には、「伝え手」と「受け手Ａ」としての、そして後者には「受け手Ｂ」としての立場と役割を認識させるようにしました。これまでの「伝え手」と「受け手Ｂ」に加え、新たに「受け手Ａ」としての立場や役割に着目したことが、今回の特に大きな試みです。

「受け手Ａ」が「１つ１つ、○○さんにわかったか確認しながら話した方がいいと思うよ。」と「伝え手」にアドバイスをしたり、時には「○○さん、△△さんがいっていることは、別の言い方をすると、～ことなんだけどわかる？」と「伝え手」に変わったり、さらに「○○さん、△△さんが伝えたことわかった。わかったならちょっと説明してみて。」と「受け手Ｂ」に理解の確認をしたりする姿が見られ子ども同士がつながる上で大きな役割を果たしました。

分習法的な展開とグループ学習の導入

クラスのみんなでの学び合いについて、これまで全習法的な展開をベースに考えてきました。しかし、新しく学習する内容の土台となる内容の理解が十分でないために、みんなでの学び合いについていけなかったり、これまでそういった学び方をとことん追究してこなかったため、どうしたらよいのかわからず、学び合いが思うように進まなかったりするようなことがありました。

そこで、分習法的な展開を試みました。具体的には、学び合いの基盤となる事項についてしっかり押さえさせるために、そういった時間を授業の中で位置づけたり、一人学びの場面で教師による手厚いサポートを行ったりしました。また、教師が意図的に指名をし、系統立てながら考えを取り上げたり、子どもの思考を促すために揺さぶりや切り返しをしたりしながら、子どもたちの学び合いを誘導していきました。そして、子どもたちが学び合いのペースがつかめたら、教師の出番を徐々に少なくしていくようにしました。

それにより、全員が学び合うための土台に乗せることができ、どの子もみんなでの学び合いに加わることができ、さらに教師の誘導により、子どもたちは学びのペースがつかめ、個々の学びを深めるに至りました。

また、これまでのような１人ずつ発言しながら学びを深めていくような展開では、その人数が多くなればなるほど、１人の発言の機会が少なくなってしまい、せっかく「伝えたい」という気持ちを抱いてもそれができない状況が続いてしまい、その気持ちが薄れてしまうということがありました。さらに、その中で学習に遅れがちな子が多くいると、その子たちへの対応が中心となってしまい、他の多くの子の学びが深まらないということがありました。

そこで、１０人程度のグループを３つ編成し、それぞれのグループに学習に遅れがちな子を振り分け、それぞれのグループで学び合いをさせました。それにより一人一人の発言の機会が多くなり、学び合いへの意欲が持続しました。

成果と課題

仲間を意識させ、「わからない」や「ちがう」を大切にさせることが、進んで自分の考えを伝えたり、他の考えを聞いたりすることへの意欲化へつながりました。

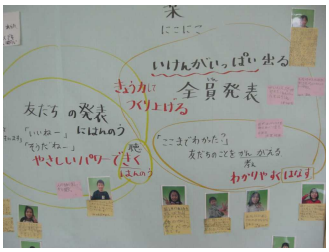
クラス全体での学び合いの場面では、「伝え手」「受け手Ａ」「受け手Ｂ」の観点に立って指導をしたことは効果的でした。さらに学び合いを深めるために、その前段階の一人学びにおける、子どもの心に働きかける教師の支援を充実させていきます。

また、クラスみんなで学び合うことが、一人一人の考えを深める上で必ずしも効果的であるとは限りません。グループでの学び合いでも効果はありました。しかし、学習の様子を教師が見届けることができなかったり、展開に時間差が出てしまったりするという課題もあります。今後は効果的なグループ学習の在り方について考えていきます。

「思いやりのあるクラス」から学びの充実へ
～学習の構えを支えとして～

大渕小学校　伊藤　愛

1　『夢』を描く　～目指す学級像・授業像の共有～



４月。明るく前向きな３年生の子どもたちと学級や授業について話し合いました。

○「思いやりのあるクラスにしたい。」
○「思いやりのある楽しい授業をしたい。」
○「みんなで考えを出し合って全員発表して作りあげる授業がしたい。」

自分たちでどのような授業をしたいかイメージを持つことで、その授業を実現するためにどのような力をつけていけばいいか具体的に考えることができました。昨年度身につけた「学習の構え」をもとに、より高い「夢」の実現へと進む第一歩です。この大事な話し合いで全員発表が達成され、満足感のもと、明日からの授業に胸を躍らせました。

2　『夢』に向かって　～学びの充実を図る授業づくり～

「ぼくは、Ａさんの言い方とちょっと違うんだよね～。」
「あ！私もそうやって考えてたんだけど途中で変わったの。前に出て説明していい？」

みんなで意識して授業に向かい続けることで、友達の意見と自分の意見を比較し、つなげていく授業が展開され始めました。

国語『すがたをかえる大豆』では、段落相互の関係を読み取る授業を行いました。『こまを楽しむ』で学習した「はじめ・中・終わり」を意識して話し合う中で、中の分け方に課題が生まれました。隣同士で相談を行い、

「『つぎに』と『さらに』はあるんだけど、『まず』みたいな最初の言葉が見つからない。」

と悩み、相談を続けました。

「ぼくたちは、『一番分かりやすいのは』という言葉が『一番』って使っているから最初にくると思う。」
「私たちは中身を読んでみたら、分かりやすい順になってると思ったんだ。だから、『一番分かりやすい』が最初だと思う。」

学習の構えを支えとし、温かな人間関係から生まれる自然な相談・交流の輪を広げ、自分たちで授業を進める力がついてきました。

さらに各ステージごとに学びのめあてをたて、成果と課題を振り返り、次のステージの取組へ生かしました。

３　『夢』を支える　～学びの定着～

全員で授業をつくり上げるためには、ひとりひとりの基礎学力が重要となります。読み聞かせのある火曜日・特別日課以外の毎朝１５分間、基礎学力の定着を図る学習の時間「わくわくタイム」を行ってきました。３年生の実態として、九九がすらすら出るまでの定着を図る必要を感じ、百マス計算を取り入れました。

「やった！昨日より早くなった！」

「七の段が２年生の時よりすぐ思いつくようになった。」

かけ算の筆算やわり算の正答率が上がり、自信を持って授業に向かうことができるようになりました。

各ステージの終わりには国語・算数の「マスターテスト」を行うようにしました。算数でＳさんが苦戦。１回目での合格はかなわず、寺子屋で特訓することとなりました。寺子屋とは、金曜日の６校時（１年生は５校時）に行われる基礎学力の定着を図るための時間です。個別に指導できるため、その子のつまづきやすい部分を把握しやすく、半具体物操作も取り入れながらじっくり問題に取り組むことができました。２回目の寺子屋で、見事Ｓさんは合格を果たし、満足した顔で教室を後にしました。これで全員が合格。学びの定着を確認できました。

４　『夢』の実現　～仲間と作り上げた充実感～

学習の構えを土台とし、思いを共有し、夢に向かって進んできました。子どもたちの中から自然発生的に友達のよいところや頑張りを伝え合ったり認め合ったりする活動や、今日のめあてを投げかける活動が係を中心に展開されるようにもなりました。自分たちで課題を見つけ、主体的に物事に取り組む態度や思いやり溢れる雰囲気が育まれました。

学校評価を見ると、「温かい心で学校生活を送ることができている。」に肯定的な回答をした児童は９５％。「学校は楽しい。」「自分の考えを発表している。」「好きな授業がある。」「楽しく遊べたり、話せたりする友達がいる。」に肯定的な回答をした児童は１００％でした。できた、わかった実感を味わう授業が展開されてきた結果です。また、子どもたちが自分たちの手で「夢」を共有・意識し、達成した証拠です。

これからも、子どもたちが自分たちで気持ちのよい学級・学校・授業をつくり上げていく姿を応援し、導いていける教師でありたいです。

じっくり考え表現できる子～進んでかかわり、自分を深める～

栄川中学校　平岡　綾子

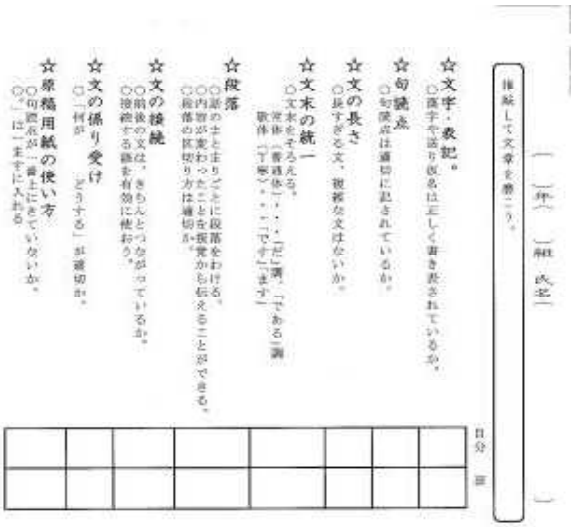
本校の研修と実践のポイント

一貫研が行われている本校では、幼、小、中、共通して目指す子どもの姿に現れる力として、「自分の思いや考えを分かりやすく表現する力」「友達の思いや考えを認め、自分の考えづくりに生かす力」ととらえ、授業スタイルの統一や単元構想の充実、小集団活動を活性化させる学習課題の設定、話し方・聴き方の育成を手立てとして行ってきました。この研修方針を受け、私としても、ねらいをもった交流の位置づけと、視覚化・焦点化・共有化といった学びのユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりを意識してきました。以下が実践のものがたりです。

第３学年国語科の実践

題材「推敲して、文章を磨こう」

あえて間違えて書かれた課題文を推敲し、読みやすく分かりやすい文章にする観点を全体で押さえ、その後、自分の作文の推敲作業を行った。原稿用紙の枠線が入ったホワイトボードを使用し､全体で課題文を見ながら推敲できるようにしました。また、生徒が見つけた間違いを、ポイントとして黒板に表記し、視覚化と焦点化を図りました。



作文を推敲する活動を個人→班活動とし、いろいろな作文をお互いに読み合う活動としました。この活動を通して、自分では気付かなかった部分を見つけたり、友達の文章を参考にできるように設定しました。

【ねらいをもった交流】

第２学年国語科の実践

題材「発表資料を工夫しよう」

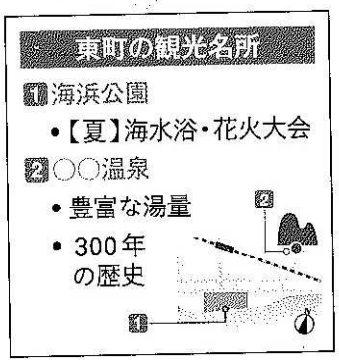
資料を見比べる活動や、発表資料を作成する活動を通して、効果的な資料の作り方が分かることを目標に行いました。キャリア教育として実際にプレゼンテーションをするための資料を総合の時間で作っていた時期に合わせて実践しました。総合での発表の際、相手の立場に立ったプレゼンテーションや相手に分かりやすく説明することの大切さを学ぶ機会となれば良いと考えたからです。

この実践では、
①教科書の例を拡大コピーしたものを黒板に貼り、比較しやすいようにする。【視覚化】
②まとめ方の違うグラフを提示し、受け止め方の違いについて考えさせる。【焦点化・共有化】
③各班にホワイトボードを配布し、班で相談してまとめやすいようにする。【共有化】
④自分とは違うまとめ方を班員同士で見合いまとめる、班で完成した資料を全体の場で発表し、良い点を学ぶ【ねらいをもった交流】を意識して行いました。

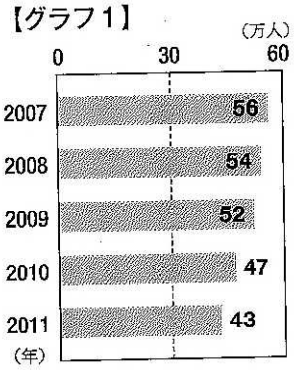
【発表資料１】

南の海岸沿いに広がる海浜公園は，夏には海水浴や花火大会でにぎわう，東町でも有数の観光名所だ。
また，北の山あいには，豊富な湯量と300年の歴史をほこる〇〇温泉がある。

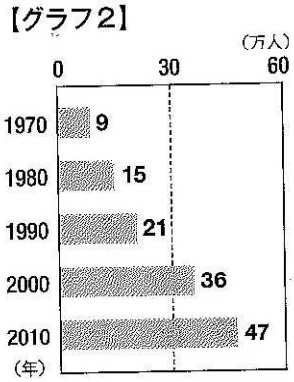
【発表資料２】



【グラフ１】



【グラフ２】



成果と課題

何事も、タイムリーに行うことは大事であると感じました。今回、２年生の実践でも、実際に自分がプレゼンテーションを行わなければならないという状況に置かれていたため、真剣に授業に取り組む姿勢が見られたように思います。また、このものがたりには載せていませんが、職場体験学習先にお礼の手紙を書くという活動でも、やはり真剣さは増していたように思います。相手への失礼がないように、自分の思いを効果的に伝えるにはどうしたら良いか等を考えて活動をすることができました。そうした自分の思いが強いほど、交流活動にも生きてくるように思います。どうしたらよりよい文章になるか、見やすく伝わりやすい資料を作るには、どこをどう工夫したらよいのか、自分一人では解決できないような課題を、交流を通して解決していくことにつながったように思います。

このように、自分の思いとつながる課題であれば、交流活動も活発に行われることを改めて感じます。今後、小集団活動を活性化させる学習課題の設定は、引き続き課題としていきたいです。

「国語は楽しい」を生み出すために

東中学校　鈴木　晶子

「国語は嫌い」という生徒が多いという話をよく聞きます。生徒との会話の中で「友達と話しをするのは好きだけど、スピーチは嫌い。」「自分で選んだ本を好きなように読むのはいいけれど、国語では、登場人物の気持ちを考えて読むことを求められるから嫌だ。」という話が出てくることも少なくありません。国語教師として大変残念に思います。しかし「話しをすることが好き」「本を読むこと自体は嫌いでない」のであれば、苦手と感じる原因を考え、手立てを取ることで「国語は楽しい」という思いを生み出すこともできるのではないかとも思っています。

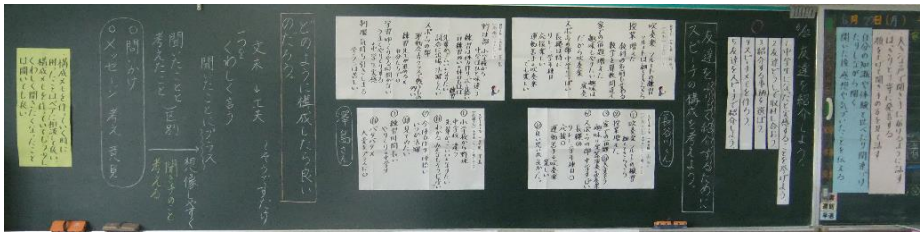
モデルの提示で目指す姿を明確に

１年生の最初のスピーチ教材では「中学生になったと実感すること」をテーマに、他己紹介をする活動を行いました。自分のことを話すのではないため、ペアの生徒への取材が必要となります。まずは「相手からうまく話を聞き出すにはどうしたら良いか」を学習するため、先生方に協力していただき、モデルビデオを作成しました。モデルビデオには、「相手の言葉を受けて質問をし、より多くのことを聞き出していく姿」と、「相手意識がなく、事務的に聞き取っていく姿」の両方を入れ、より良いインタビューの仕方とはどのようなものかを考えさせていくことにしました。話を聞き出すポイントを確認したところで「自分たちでもやってみよう。」と投げかけると、学んだことを意識して話しを始めました。普段は自分の話したいことだけを言いがちな生徒が、より多くの情報を聞き出そうと質問を重ねる姿も見られました。どのペアにも笑顔があり、途切れることなく話をすることができていました。

教員によるモデルビデオ

様々な情報を得た後には、その人を紹介するのにふさわしい情報を選び出し、よりよく伝えるための組み立て方を学習しました。グッドモデルとバッドモデルを組み込んだ２つのスピーチメモを示し、「どのようなことに気をつけて構成をしたらいいのだろう」を学習問題として、話合いを進めていきました。聞いたことをただ並べるのではなく、内容を絞って詳しく話すことや、自分の意見を交え、聞き手に興味をもたせるような構成をしていくことが大切だという意見が出てきました。構成メモを作る時には、ペアに追加で質問をしたり、アドバイスをしたりしながら積極的に活動する姿が見られました。

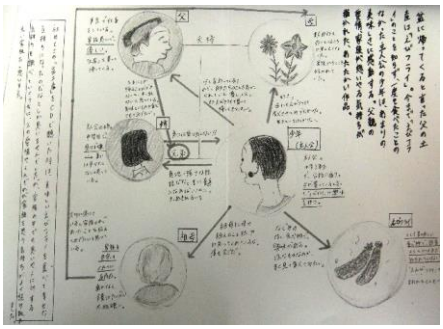
スピーチ発表会では、どの生徒もよりよく伝わる構成を意識し、堂々と話しをすることができました。終了後には、「自分のことを上手に紹介してくれて嬉しかった」「またやりたい」「初めは嫌だったけど、やってみたら楽しかった」という声が聞かれました。上手に話すことができれば自信がつきます。どういう姿が良いのかを示し、イメージをもたせることが「話す」ことへの苦手意識を減らすことにつながると考えています。



「読んでみたい」を引き出す工夫を

２年生の『盆土産』では、登場人物の気持ちを読んでいきました。表現から登場人物の気持ちを読む活動はよく行われますが、読むことに目的意識をもたせたいと考え、登場人物の人物相関図を作ることにしました。

導入時に別の話で作った見本を見せ、人物像や人物同士のお互いに対する気持ちをまとめていくことを伝えました。その後、人物の言動から考えられることを読み取り、毎時間、学んだことを自分の言葉で簡潔にまとめていきました。最終的に相関図にまとめるということで、話し合いを積極的に行い、人物の気持ちや性格を捉えようとする姿が多く見られました。右の相関図を作った生徒は、学習後の感想で「最初は美味しいえびフライを食べて幸せだったのだとしか思いませんでしたが、家族の思いや、人に対する気持ちを調べていくうちに、父の愛情やそれぞれの家族を思う気持ちがよく読み取れました。良い家族だと思いました。」と書いています。読みを重ねることで考えが深まった様子がわかります。



「読む」ことが繰り返される国語は、苦手な生徒にとっては、気持ちを読み取ることだけを求められる単調な教科となっているのかもしれません。「国語だから読む」のではなく、読む必要性を感じ、読んでみたいと思わせる工夫を取るように心掛けています。

国語は楽しい教科だ

現在私は、１、２年生の担当をしています。教科アンケートには、１年生 88%、２年生 90%の生徒が「国語が好き」と答えました。取組の成果だと捉えるとともに、残りの生徒が何を苦手とし、どうしたら「国語は楽しい」と感じられるかを考えなくてはいけないとも思っています。私が中学生の頃、国語はとても楽しい時間でした。もっと色々なことを知りたい、次の話は何だろうとわくわくしたことを覚えています。同じような思いをより多くの生徒が得られるように、今後も取組を続けていきます。

みんなが参加する授業

西中学校　太田　浩徳

社会科の目指すもの

社会科の授業を進めていくと、「社会科は暗記科目だから」という声が相変わらず子どもから聞こえてきます。歴史の授業も「歴史好きの子がどんどん答えを言ってしまってつまらない」なんてこともあります。確かに知識は大切なことなのですが、私たちは子どもたちに「なぜそんなことをしたのだろう」「何で、そんな仕組みにしたのだろう」と「なぜ」を考える事が社会科で付けたい力であると考えています。

「なぜ」を考える授業を進めるときには、子どもたちが各々自分の考えをもって授業に臨む場面や、自分の考えと周囲の多様な考えを比較・選択する場面が重要になります。そして、答えが一つではない問いに取り組むと子どもは色々な考えをもち、多面的なアプローチを始め、話し合いが活発になります。だから、そうした問いを意図的に授業に取り入れることで、多くの子が授業に参加し達成感を味わうことができる「授業のユニバーサルデザイン化」は、次への学習意欲の向上にもつながると考えました。

答えではなく、考え方を学ぶ

教室には様々な子がいます。自分から進んで学習に参加する子もいれば、座学が苦手な子もいます。でも授業は一部の子だけのものではありません。多くの子が分かりやすく学べるよう授業を組み立てるが私たち教師の役割です。

分かりやすい授業とは、課題のハードルを下げるのではなく、課題をクリアしたことを子どもが実感できる授業です。そのためには、教師は授業の流れに一定のパターンを作り、答えを教えるのではなく、考え方を教える事が肝心です。ここが抜けている社会科の授業が多いために冒頭のような意見が子どもから出てくるのではないでしょうか。

「アメリカの南北戦争でなぜ南部の独立を北部は認めなかったのか」この課題を南北戦争に至る北部と南部の産業と貿易体制の考え方の相違といった、既習事項だけを手がかりに考えるのが難しい子もいます。

どうすれば、この子が取り組めるのかを考えてみましょう。まずは、考え方のヒントを出してみます。歴史に「…したら」「…すれば」はないのですが、「南部の独立を認めたら北部に不利なことはないだろうか」と仮説を立てさせてみます。そうなっては困るから、人々は禁止を

する。これは、決まりや理由の原因を考える方法の一つです。南部が独立したら、北部は陸続きの外国になった南部から綿花を輸入することになる。輸入したら関税をかける。関税をかけたら価格が高くなり、イギリス産の綿製品より売れなくなる。こうしたスモールステップの積み重ねで答えに導くのです。

地理分野の中国・四国地方では大都市と小都市におけるストロー現象の長所・短所を考えました。班学習の形態を作り、友だちと話し合いながら付箋で書き出し、比較することで自然と長所・短所を文章化するときの目安にさせました。

毎時間の積み重ね

「なぜ江戸幕府は260年間も続いたのだろう？」同じ幕府と名のつく鎌倉幕府と比較した子どもの疑問です。この答えを一言で言い表すのは至難の業ですし、どこに視点を当てれば良いのかも子どもには分かりません。そこで、「これから江戸時代の学習を進めて、最終的にその答えをもう一度考えよう」と子どもに投げかけ、その答えを導くヒントを各授業にちりばめるよう工夫をしました。

みなさんは、ゴールのないマラソンに参加してみたいと思いますか？何かに取り組むとき、達成感は参加意欲を持続させる大切なものです。その達成感はゴールがなければ得られません。そこで、毎授業ごとその授業で最終的に考えたい内容（ゴール）を冒頭に板書しました。「何で、参勤交代をさせたのか」「貿易による収入を減らしても鎖国をしたのはなぜか」「寛政の改革よりも田沼の政治を人々が支持したのはなぜか」「井伊直弼はなぜ朝廷を無視して条約を締結したのか」この各ゴールが最終的に「なぜ江戸幕府は260年間も続いたのだろう？」を考えるためのヒントになります。もちろん、学習内容を忘れてしまう子もいるので各々の取組はワークシートに記録をさせてファィリングしておきます。振り返りでは、それらを活用して色々な視点から幕府が続いた理由を自分の言葉でまとめていきました。

授業からの広がり

班で話し合うような小集団で課題を解決する際、まずは個人で考え、次にペアでの話し合い、自分の考えをしっかりもった上で班の話し合いをさせるように心がけました。司会は班長に任せますが、話し合いの視点を明確にして話す事をくり返し指導します。最初はぎこちないですが、数回やることで慣れてきます。何よりこの効果は、学級の人間関係をより円滑にする一助となりました。授業の良い流れが学級の良い雰囲気作りにつながるのはうれしいことです。今後は、折角理解した内容を以下に定着させるかが課題です。

「やる気」「やさしさ」「たくましさ」をもった子どもの育成
～道徳教育を基盤として～

桜が丘中学校　湯山　珠沙

全力で取り組み、仲間を思いやることができる学級を目指して

２年生へと進級した４月。１年間違う学級環境の中で生活してきた生徒たちは、学級に対する考え方や想いの強さに大きな差がありました。その差を埋めるため『仲間』と『友だち』の違いについて学級で話し合いを行いました。

> ◎苦手だと思う人も一緒に戦う仲間だから、大切にしなきゃいけないと思った。
> ◎最後には必ず仲間っていいなと思うけど、行事に全員が最初から真剣に取り組まないと泣いたり、笑ったりはできないと思いました。　（生徒の感想）

このように仲間を大切にしたい、という意見がたくさん出てきました。そこで何事にもクラス一丸となって頑張りたいという想いを込め、学級目標を「心をひとつに」としたのです。しかし、その想いとは裏腹に全員が本気になれないことが多く、生徒の間に温度差が生まれていったのです。その練習です。本気で戦いたい生徒よりもなんとなく集団について行っている生徒がほとんどでした。仲間の気持ちを本気で受け入れず、自分の想いを伝えない。ただ「なんとなく」という生徒の多い学級でした。

考え、議論し、本音で語り合う道徳

そこで自分の考えを伝え、相手の考えを受け入れる大切さを実感して欲しいと思い、道徳の時間で議論する授業を積み重ねていきました。中心発問を葛藤のある場面について考えさせたり、生徒たちの心情により近づけるリアリティのあるものにしたりして、意見をぶつけ合う場面を意図的に作りました。６月の道徳では、自分の考えをただ伝えたり、正当な意見を答えたりすることが多く、仲間の意見を受け入れる生徒も少なく、本音を出せる生徒はほとんどいませんでした。そこで発問を吟味し、効果的な発問や意図的な切り返し、構造的な板書など、本音を引き出す工

少しずつ本音の意見を話すようになり、意見をぶつけ合うようになっていったのです。また、仲間の意見を聞き、自分の考えを返すようになり、「自分の考えを伝えたい」という想いをもち、活発な意見交換のある道徳の時間になっていきました。

> ～授業後の生徒の日記より～
> ○道徳の時間は反応と発表が多かったです。１時間がとても短く感じました。
> ○道徳の時間は時の過ぎるのが早くてあっという間に授業が終わってしまいました。
> ○たくさんの意見が出てとても楽しかったです。【これぞ４組！！】って感じでした。

「まごころ　～一日一善活動～」のスローガンの元、全校を巻き込んだ道徳教育

道徳教育は授業だけではなく、生徒会活動でも実践を積み重ねていきました。

前期生徒会スローガンは「まごころ」。ちょボラ(ちょっとしたボランティア)を合言葉に朝のゴミ拾い登校、朝清掃活動など生徒会が呼びかけ、企画した取組に全校生徒がボランティアで参加をしました。さらに、後期生徒会スローガンを「まごころ＋　～一日一善～」としました。一日一善活動を基盤に生徒たちが自主的に行えるような取り組みを考えました。

企画を投げかけるだけでなく、昼の放送でニュース記事を紹介し、それに対しての意見を募り放送することで、いろいろな人の意見を聞き、考えられました。また、委員会活動や部活動でも一日一善活動を取り入れ、生徒たちがまごころをもって自主的に行動できるような場面を意図的に作り出したのです。すると部活動の試合会場でも自主的にゴミ拾いや準備片付けを行う生徒が増えていきました。

確かな道徳性の芽生え

学級がスタートした当初は、口先だけで行動が伴わなかったり、本心は別の考えを抱いていたりという生徒が多い学級でした。しかし、さまざまな行事や日々の生活での諸問題をクラス全員で考え、意見を伝え合い、乗り越える経験を積んできました。それにより達成感を味わうことによって、学級に変化が見えてきました。

～道徳の授業「誰のため？何のため？」　生徒の感想～

○小さなことでも他の人が感謝してくれるなら、自分が喜べるし良い気分になると思った。

○どんな目的でやっているのかを考えることは大切だし、自分の協力で人が「助かったよ」といってくれると自分も嬉しいし人も嬉しい。そういう活動で自分自身も成長できると思う。

○今まで誰のためなのか考えると共通して『クラスのため』だったと思う。だから一生懸命どんなことにも取り組めた。これからもクラスのために頑張りたい。

○『自分のため』はどれにも当てはまると思う。今まで目的が何か考えていなくて何となくやっていた時もあったから目的をしっかり考えて行動したい。

さまざまな経験の中で、自分の思いや考えを伝える大切さ、また相手の考えを受け入れる柔軟性、相手の気持ちを考える力が育ちました。そして、周りの仲間を思いやることで本気になれる、自分以外の人の事を考えられる集団の雰囲気が、よい学級を創り出していくということを実感することができました。

ようこそ、はらのやミュージアムへ

原野谷中学校　城下　俊介

Ⅰはじめに

本校は日々、生徒達の笑い声が絶えず、元気で明るい学校です。大変素直な生徒が多いですが、反面、自信がなく自分の思いや考えを表面に表すことが苦手な生徒もいます。そんな生徒のために「はらのやミュージアム」と題し実践を行いました。校内に自分の絵が展示されることによって自信が付き、友達の作品を見ることによってお互いが認め合い高め合うこともできます。本校の校訓は「心ゆたかに」です。芸術作品を通して少しでも生徒の心がゆたかに成長してくれたらと考えました。普通に生徒作品を廊下や掲示板に展示するだけでなく、展示方法を工夫したり著名な作家の作品を紹介したり等、美術作品で学校全体を明るい雰囲気で包み込んでみようと考えました。

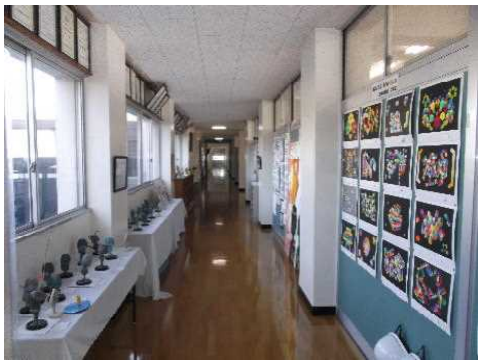
「それでは、はらのやミュージアムをご案内いたします。」

Ⅱミュージアムの御案内

１　まずは正面玄関からお入りください

正面玄関から入ってまず最初に出迎えてくれるのが１年生が制作した「原野谷川の河童たち」です。故郷の自然に目を向けよう。地元を流れる清流「原野谷川」に河童が住んでいるとしたら？というコンセプトで制作しました。魚釣りをする河童。テニスをしている河童。不思議なことにどの河童も笑っています。優しい河童たちがお客様を笑顔で出迎えてくれます。

２　アートストリート



玄関を入って最初の廊下は全校生徒のデザイン画、絵画、工芸と様々な作品が並ぶアートストリートとなります。中でも美術部が制作した体育祭の会場に飾られるビッグアートが圧巻です。

３　アートストリートを抜けたら階段にも注目

階段にも目を向けてみましょう。ユニバーサルデザインというほどではありませんが「しっかり右側を通りましょう」と言わんばかりの明るい矢印が並びます。上方向と下方向を意識して、１年生がグラデーションの技法を使って制作しました。

４　ゴッホやピカソだけが芸術家じゃない

当ミュージアムは生徒の作品だけではありません。著名な作家を紹介するコーナーやトリックアートなど「絵の不思議」を紹介するＡＲＴコーナーもあります。ゴッホやピカソのような教科書に出てくる著名な作家だけでなく、イラストレーターや切り絵作家など知られざる数々のアーティストを紹介しています。

５　昇降口にも注目

生徒達が毎日通る昇降口。ここでは天井からデンマークモビールが揺れています。このモビールの下を毎日「おはようございます」の元気な挨拶とともに生徒が登校してきます。

「今日も一日がんばろう！」

ユラユラと揺れながら生徒たちを出迎えます。

６　ＷＩＮＤ　ＳＴＲＥＥＴ

校舎の外もぜひ御覧ください。本校舎と北校舎の間。ここは「ＷＩＮＤＳＴＲＥＥＴ～風の通り道～」と呼ばれ、生徒達が制作した風見鶏たちが風を受けて優しくカタカタと揺れています。

７　出張ミュージアム

本ミュージアムは学校を飛び出して出張美術展も実施しております。最近では生徒が制作した手作り年賀状を地元原谷郵便局と原田郵便局の御協力の下、各郵便局内で展示会を開催いたしました。それぞれの局長さんにも御協力をいただき、作品の中から「郵便局長賞」を選んでもらい表彰しました。

Ⅲ　成果と課題

校内には小規模校の利点を生かし、全生徒の作品を展示しています。今回の実践から、自分たちが制作した作品が学校の環境に大きく影響しているという実感を持たせることができました。また、自分の作品が「生きている」「生かされている」と実感させることで、少しずつ「自信」が出てきたと感じています。校舎内に飾られた自分の作品を嬉しそうに眺めながら、廊下を歩いている生徒の姿を見る度にそう思います。

最近は生徒の方から「○○にこういう作品を展示するといいんじゃないですか？」という提案も出るようになりました。今後は生徒の意見をもっと取り入れ、「はらのやミュージアム」を発展させたです。また地域の方も気軽に見に来ていただけるよう、地域への発信も積極的に行っていきたいと考えます。

「みなさま、はらのやミュージアムに足をお運びください。たくさんの芸術作品がみなさまをお待ちしております。」

少人数を生かした授業

北中学校　萩田　駿

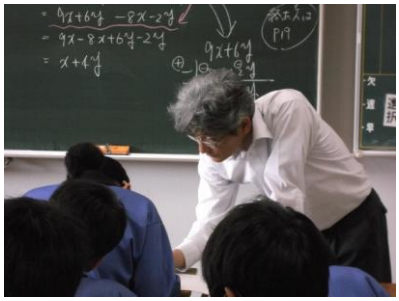
生徒15人の少人数授業

「どうして答えがそうなるの？」「先生質問です」「私では解けそうにない」という声や、声には出さないが思考が止まっている生徒に対し、なんとかしたいと思いながらも、個々に対応するのは授業の時間だけでは足りないことがありました。

しかし２年生の数学では、学年を二人で担当することになりました。これまでの少人数指導といえば、習熟度別にグループを編成することが多く、数学の苦手な生徒が集まるグループは、生徒同士で高め合うことができず、先生との１対１の学習となります。これならば、ＴＴでも変わりません。せっかく少人数にするなら、生徒同士のかかわりが生かされるようにしたい。この少人数指導を全時間で行えるという恵まれた環境を生かし、生徒全員が自分の考えを表現できる授業に取り組んでいきたいと考えました。

「考える」「表現する」を練習する

まず、意識したのは小集団になる前に全員が自分の考えを持てるように、時間を十分に確保すること。他の生徒のつぶやきから考えたり、既習事項をノートで振り返ったりして自分の考えをもたせました。意見がまとまらない、考えが思いつかない生徒には、教員が１対１で支援できました。早く思いついた生徒にはノートに書くようにさせ、図や表、計算式など用いて考える過程も話し合えるようにしました。



次に、小集団学習（３人くらいのグループ）では全員が自分の考えを表現することを目指しました。学級での授業では、生活班があるので、どうしてもそれをいかした形で小集団を編成することが多くなります。すると、１つのグループが５人から６人になります。これですと、小集団での話し合いをしても、その中の何人かは話し合いに参加しないことがしばしばありました。それを反省し、本校の研修では小集団の人数を４人以下にしています。そのため、４人以下のグループとなり、自分の考えを他者に伝えなければならないという必要性ができました。小集団で考えを出し合っても解決しない場合は疑問点を出し、その疑問を全体で共有した。他の集団からのアドバイスを交換し、生徒同士の考えをつなぐことを意識しながら進めていきました。生徒自身も自分の集団の疑問が全体で共有されることによって、意欲的に取り組みました。

「今日の授業を振り返りましょう。その時、グループでの発表がどうだったのかを評価しましょう。」

授業の終盤に出す指示です。４人以下のグループが４つになったことによって、グループでの全体発表がスムーズになったばかりでなく、グループ内での発表もできるようになりました。そこで、グループ内で問題を分担し、解き方を説明するようにしました。自分が担当する問題が決まっているので、自分の課題として取り組めるようになってきました。

小集団で話し合いが進まない

一定期間ごと少人数集団のメンバーの入れ替えを行ってきました。メンバー分けは出席番号順で決めていましたが、話し合いが苦手な生徒、数学が苦手な生徒が集まった小集団ができるといった偏りが見られるようになりました。自分の考えを伝え合うことにためらい、なかなか活動が始まらない様子も見られました。

そこで、集団構成を見直し、少人数だからできる、意図的な集団構成を行いました。少人数でなければ、「数学の時間だけ、生活班を崩して意図的な小集団で行おう」ということは容易ではないはずです。いくら学力バランスを考えて生活班を構成しても、数学という１教科で考えたとき、その生活班が適当な集団になるとは限りません。だからこそ、２学級に分かれ、生活班にとらわれない集団構成ができることが、学び合える小集団学習を行う好機となりました。個々の生徒の特徴を考え、構成を見直し、偏りをなくすことで、以前より自分の考えを言い合えるようになりました。

また反対に、一人の生徒が中心になって話を進めてしまう様子もありました。そこで、小集団内で司会、ホワイトボードにまとめる役、全体で意見を発表する役を異なる生徒で分担しました。小集団が４つのため、同じ問題を２つの集団が発表したり、４つの問題を小集団ごと担当し、説明し合ったりするなど、発表の機会を増やすことで、一人一人が小集団活動に主体的に取り組むようになりました。

話し合う雰囲気に

生徒全員が自分の考えを表現するために、意図的な小集団構成、発表する機会を増やすなど、少人数授業を生かした授業に取り組んできました。12月の授業評価アンケートでは「他の人に説明する機会が増えたことで、前よりも授業内容がわかるようになった」「班で説明できるようになった。次は黒板で説明できるようにしたい」など小集団を有効に使えたという意見や、「先生が丁寧に教えてくれたので少しずつ理解できました」などの意見があり、少人数授業の効果が見えてきました。生徒１人に関われる時間が通常よりも倍になったことで、個々の定着状況に合わせた支援ができました。

また、最近では「先生わかりません」という声が「〇〇さんどうなった？」「〇〇君これってこういうこと？」という声に変わってきました。小集団での活動を通して、考えを話し合おうという雰囲気ができてきました。

今後は、小集団での「わかった」「できた」という経験から、「わかりたい」「できるようにしたい」という、積極的な姿勢につなげていきたいです。

「生徒が主体的に追究・表現」する授業をめざして

城東中学校　岸　美律

研修テーマ「生徒が主体的に追究・表現し、『わかった』『できた』を実感できる授業づくり」をめざして

起・・・授業改善のために

今年度は、研修テーマ「生徒が主体的に追究・表現」する場面の工夫に重点をおいて、授業改善を試みました。我が校の実態として、「自ら考え、主体的に学び、探求する力」に課題があるという背景があります。生徒たちが「なぜ〇〇なのだろう」、「どうしたら〇〇できるかな」という思いをもって主体的に追究・表現できるようにすることで、ことで、思考力や表現力を高めていきたいと考えました。

そこで、目指す授業像を共有するために、中堅教員による模擬授業を、職員が生徒役となって行いました。これによって、「導入でこういう工夫ができるのか」「応用して、他の教科ではこのような工夫ができるのではないか」「この部分をこうしたらもっと主体的に取り組めるのではないか」などの、様々な意見が出され、職員全体で目指す授業像や課題を明確にしました。

承・・・研修テーマに基づいた授業実践

目指す授業像を具現化するために、職員でいくつかのグループをつくり、公開授業を行いました。「生徒が主体的に追究・表現する」場面に視点をおき、その手立てが有効であったかについて、感想箋を交換して事後研修を行いました。「あの場面であの補助発問があったからよかった」「もう少し資料を工夫するとさらによいのでは」「あの場面でのグループ活動は有効であった」等の意見が出るなど、他教科同士でも自分の実践に生かすことのできる研修でした。

＜「生徒が主体的に追究・表現」する場面に工夫した実践　３年　社会科＞

３年生の社会科、公民の分野において「裁判員になって判決を下してみよう」という学習課題のもと、授業を行いました。「検察官」、「弁護人」、「被告人」、「証人」役の生徒をたて、それ以外の生徒が裁判員になり、ある事案について模擬裁判を通して話合いを行うという内容でした。生徒たちにとって実際に裁判を行う体験は大変興味深いものであり、生徒全員が授業にのめり込んでいく様子が伺えました。判決を下すための話合いを小集団で行い、様々な視点から意見が出され、白熱した討論が繰り広げられました。

また、「価格が決まる仕組みを学ぼう」の授業では、商品の価格設定について考えました。導入で「普通の秋刀魚」と「金色の秋刀魚」の写真を提示し、どちらの価格が高いだろうと投げかけます。この時点で生徒はぐっとひきつけられたようでした。その後、「繁忙期の旅館の価格」、「スーパー閉店間際の弁当の価格」、「富士山頂でのジュースの価格」など、様々な状況が書かれた６枚のカードをもとに、「それぞれの価格はどのようになるのか。その根拠は何か」について、生徒は実際の生活体験や、既習事項をもとに活発に意見交換をした。「これは〇〇だからこうなるだろう」、「いや、こういう背景があるからこうなるのではないか」と、「自分の考えを言いたい」、「解決したい」という主体的な姿勢で学習活動を行うことができました。

転・・・実践から見えてきたこと

各教科で「生徒が主体的に追究・表現」する場面を工夫することによって、生徒の意識も変わってきました。授業アンケートの「授業が楽しい」、「もっと知りたい・やってみたいという気持ちになる」という項目について、７月よりも１２月のアンケートの方が、数値が上昇しています。導入で生徒をひきつけたり、学習問題を視覚化・焦点化したりしてやる気を引き出す、生徒同士の意見交換の場面を工夫するなど、今年度の研修テーマを意識した授業実践が行われてきた成果であると考えます。

しかし、授業アンケートの「授業が楽しい」、「もっと知りたい・やってみたいという気持ちになる」という項目の数値に比して、「授業がよくわかる」という項目の数値は、多くの教科で低くなっています。このことから、生徒はやる気をもって楽しく学習してはいるが、「わかった」「できた」の実感に到達していないという課題が見えてきました。

結・・・今後にむけて

「主体的に追究・表現」する活動を通して、より多くの生徒が「わかった」、「できた」を実感できる授業づくりに一層の力を注ぎたい。そのために、もう一度原点に立ち返り、授業者が「その単元・教材で身につけさせたい力は何か」を明確にして授業を構想していく必要があります。当然のことですが、「主体的に追究・表現」する場面の工夫は、身につけさせたい力を、確実に生徒に身につけさせるための手立てであるからです。「わかった」、「できた」を実感できた生徒は、さらに「主体的に追究・表現」したくなるでしょう。そして、生徒の中で教科の力が身についた手応えを感じることができれば、自己肯定感も高まると考えます。

めざす城東中生の姿である「自ら考え、主体的に学び、探求することができる生徒」「自分の意見をわかりやすく人に伝えることができる生徒」「相互の意見を認め合い、自己肯定感をもつことができる生徒」にさらに近づくために、職員一丸となって生徒と共に授業をつくり、学びを生かす教育にいそしんでいきたい。

追 究 活 動 の 工 夫 を 目 指 し て

大浜中学校　大杉　鏡康

起 … 全 員 で 意 識 を 共 有 し ス タ ー ト ！ ！

今年度、大浜中学校は「ともに高め合い、学力を伸ばす授業づくり　～追究活動の工夫～」というテーマで、校内研修を行いました。生徒が課題解決に向かって主体的に活動するために、教師が授業展開で追究活動の方法を工夫します。それによって、生徒同士で高め合う意欲的な活動となり、学力を伸ばすことができる、という仮説をもとに、１年の校内研修を進めていきました。

承 … 職 員 全 員 で 参 観 → 反 省 × ４ ！ ！

年度初めに行われる全体研修の中で提案されたのが、以下の方法です。

①１年に４回、４人の職員で中心授業を行う。

②中心授業は職員全員で参観し、全員で事後研修を行う。

③授業者は中心授業を行う前に、細案を作成する。

実践をし、それを職員全員で共有することで、生徒の学力向上につなげるねらいです。５月、６月、９月、１１月に中心授業を行い、事後研修も行いました。

５月１１日　社会

６月１７日　国語

９月２日　数学

１１月４日　社会

転 … 外 部 の 力 で 活 性 化 ！ ！

中心授業後の事後研修では、職員同士で活発な意見交換が行われ、大浜中の生徒の学力を向上させるために熱心な議論が行われました。授業についてじっくり話し合う時間が確保できたことによって、中心授業者はもちろん、全ての職員が自身の授業改善を意識することにつながりました。

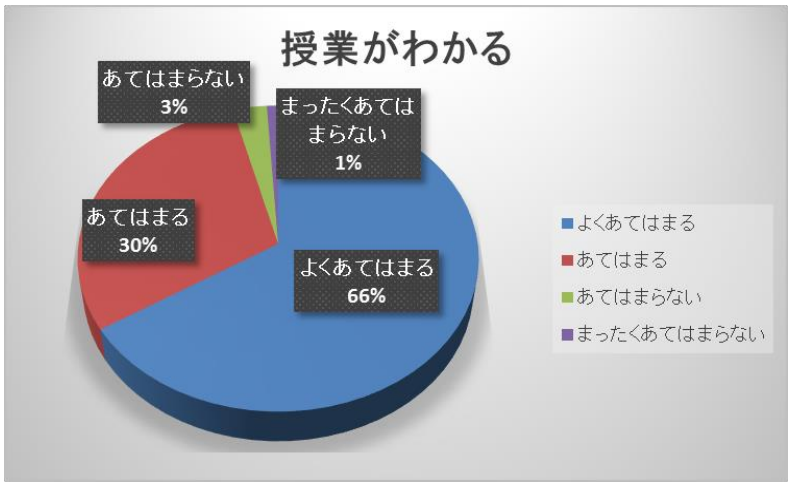
しかし、毎回同じ方法の事後研修ではマンネリ化が進んでしまいます。

そこで、外部から講師を招き、校内研修に参加していただくことで、授業改善の活性化につなげることにしました。１１月４日には、小笠教育研究協会の社会熊倉先生との話し合い

科研究推進委員である掛川東中の太田静男先生、１月２２日には静岡大学教育学部の熊倉啓之先生が校内研修の中で助言をしてくださいました。特に、熊倉先生にはアクティブ・ラーニングについての講義後、本校職員や大浜中学校区の小学校の職員を交えて、授業改善に関する話し合いに参加していただきました。熊倉先生の専門教科の数学に限らず、多くのアドバイスを得ることができ、その後の授業改善に役立てることができました。

結 … 成 果 、 課 題 、 そ し て 来 年 度 に 向 け て

このような取り組みを行い、授業改善を重ねた結果、「授業がわかる」と答えた生徒の割合は、全校生徒の９６％にのぼりました。（１２月に実施した生徒からの授業評価アンケート集計結果より）追究活動の工夫を心がけて、生徒の理解度を深め、学力の向上につなげていきたいです。



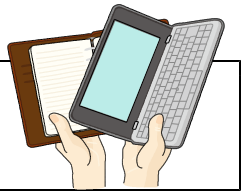
本校は、来年度にＩＣＴ研究の指定校となる。タブレット端末などを用いた授業が多くなると予想されます。ＩＣＴ機器を使うことが目的になるのではなく、それを活用する追究活動の工夫をし、生徒の理解度を深めることにつなげていきたいです。

かけがわ型スキルの育成を目指して

大須賀中学校　神谷　昭吾

21世紀に必要な学び

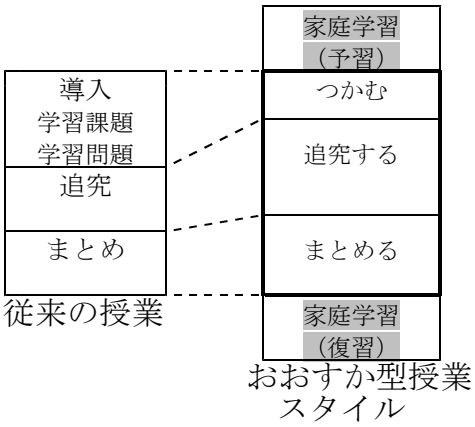
21世紀を生きる生徒には、どのような学びが必要なのでしょうか。2015年現在、コンピュータを１人１台所有し、インターネット普及率が80％を超え、スマートフォンで写真や動画を世界中の人と共有することが可能になっています。これまで人に聞いたり、本で探さなくては見つからない知識や情報をインターネットにアクセスするだけで、誰でも簡単に手に入れることができるようになったのです。このような社会を「知識基盤型社会」といいます。このような知識基盤型社会では、教えられた知識を覚えているだけではなく、問題に対して学んだことを活用したり、他者と協力して、新たな知識や価値を生み出したりする人が必要とされます。そこで、掛川市では、21世紀を生きる上で必要な資質・能力を「かけがわ型スキル」として位置付けました。



【かけがわ型スキル】
１　思考力　　２　問題解決力　　３　意思決定力
４　コミュニケーション力　　５　情報の選択・活用力
６　地域や社会の中で生きるためのキャリア体験

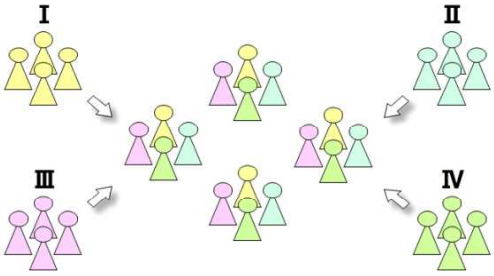
おおすか型授業スタイルの提案

授業の中で、かけがわ型スキルを発揮させるにはどうしたらよいのでしょうか。スキルを発揮させるには、生徒が他者と十分に対話する追究時間が必要です。従来の学習課題を提示してから、学習問題を生み出す方法では、導入に時間がかかりすぎます。そこで、大須賀中学校では、本時の課題につながる予習を家庭学習に取り入れることで、導入にかかる時間の短縮を図りました。そして、生み出された時間を追究やまとめの時間とし、スキルを発揮させる展開を仕掛けました。私たちは、この授業スタイルを「おおすか型授業スタイル」と呼ぶことにしました。



おおすか型授業スタイルによって生み出された追究時間ではどのような学びが行われたのでしょうか。

数学の「根号の加法の計算方法」では、ジグソー学習が行われました。従来のように、全員が同じ立場から考えるのではなく、生徒をあらかじめ、面積、数直線、近似値の異なる立場（エキスパートグループ）に分けて考えさせました。その後、それらの異なる考えをひとつに合わせることで、異なる立場の考えを比較したり、統合したりして、根号の加法の計算方法を導き出しました。



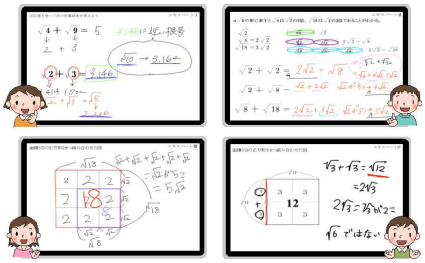
ジグソー学習の様子

理科の「植物の分類」では、予習で自分なりの植物分類を考えました。授業開始後、班の中で個人が分類した結果を話し合い、最もよいと考えられる分類方法を作りました。そして、他班の分類をタブレットPCで撮影し、自分の班に持ち帰りました。最後に、他班の考えを比較参照し、自分の班の考えを練り直しました。その結果、当初の分類よりもより複雑な分類を作り上げた生徒が増えました。追究時間で班同士が交流したことによって、自分たちでは考えることができなかった分類基準に気づき、新たな分類を生み出すことができました。

ICT機器が果たした役割

知識基盤型社会で重要な役割を果たすのがICT機器です。ICT機器は、おおすか型授業スタイルの中でどのようなツールとして活用されたのでしょうか。

数学「根号の加法の計算」では、エキスパートグループの学習でわかったことをタブレット端末上のデジタルワークシートに書き記しました。デジタルワークシートによって、考えを何度もコピーしたり、書いたり消したりといった作業が素早くできました。その後、ワークシートの共有機能を使うことで、自分以外の立場で考えた人のワークシートを自分の端末に取り込みました。これらと同じことを紙のノートやワークシートで行うのは、大変な手間と時間がかかります。ICT機器によって、他者の考えがより身近なものとなり、問題を多面的な視点でとらえることができたのです。



大須賀中学校では、６つのICT機器の活用方法が開発されました。

・新たな視点で考えるためのツール
・創造するためのツール
・多面的な視点で考えるためのツール
・多様性を統合するためのツール
・比較・分析するためのツール
・時間短縮のためのツール

創造するためのツール（数学）

これからの授業に向けて

これまで私たちがつくってきたおおすか型授業スタイルとICT機器の活用によって、生徒の多様な考えが共有され、批判的な思考力の発揮や、比較・統合するコラボレーションスキルを発揮することができました。しかし、同時にいくつかの課題も見えてきました。

まず、授業の中で発揮されたスキルをどう評価するかということです。生徒がどのような姿で学びに参加しているか、どのような思考を経て授業後の姿にたどり着いたのか、その学びの姿と過程を記録する必要があります。スキルを発揮する姿にも段階があり、従来の観点別評価のように、生徒が今、どの段階の姿で学んでいるかを評価する指標も必要です。そのためには、教師は期待するスキルを発揮している姿をより具体的にすることが求められます。今後は評価の段階でICT機器が活用されることも考えられます。

また、ICT機器が配備された教室は限定されています。今後、ICT機器の需要が高まるに連れて、これらの問題を解決することが必要だと考えています。